へ 5
4398

門へ5
號4398
巻
へ5
4398

文政四辛巳春刻成

夏成美先生著

四山藁

東都書林　慶元堂梓

豊久蔵
米包德
齊包昌
夏包壽
仝校

9-7-5

四山藁序

隨齋嘗以諧謔為當時〻宗匠其名詞奇句既存于世人之嘗牙矣諧語二卷其子包壽等曩集以襄于梓又有題跋記事之

昭和九年七月五日購求

文凡數百篇以同加校讐以
以海內乃徵序于余〻
讀之其文皆如名香美錦
郁然而新且其屈宋遺術
狂言猖獗可以醒世間恂
懵之解去不勝矣此集

題西山集蓋取諸蕉翁之
行次盛來縣銘云嗚呼隱
齋私淑於蕉翁之厚亦可
以見也已因序隨齋名色
嘉字成美姓夏目氏隱富
其號也

文政三年庚辰秋八月

鵬齋老人興譔

永顛道人亥書

邨嘉瑞刻

四山藁第一

隨齋夏成美著

豐嶋久臧　同
宋津包德
齋藤包昌
夏目包壽　校

望筑波山辭

東籬乃菊ゑ〻れ咲て居るゝ耳にかゝるゝく小春より紀秋乃
あ志紀を〻〻海人と柳ちりゆくひと葉のふ孫に掉ゆ〻ゆ〻
あや彩の流さのゆ〻校多りき松杉も多ちゆくせ〻ゆ〻尾花
ゆ〻たゆ〻乃素ふ〻ひさ乃川さの芦ゆ〻ゆ〻ひく汐ゆ〻

くもりのなくこれ[illegible]はるこのみやに黛乃色水天のみどりを[illegible]
れてあふけハおほふるれにえゆるもれそはく波の山ちらら
男躰女躰乃ふる[illegible]峯乃さやうにをう波まそ乃神秀あ[illegible]
いふもさるれとかうつ代のふるこ[illegible]ちこをなふとおくかゝけ
ふれさまハ春ハ嵐雪ゆむ[illegible]さ乃のうすを多なくくはちりそ
さのもうみもの陰乃つゝく今ハ老杜乃興を花多の入ふ
けくあゝしにさふれ三冬ふなれそ雪けのうちをあつゝ[illegible]る
ゆもゝまふえ〳〵万葉集乃ふるき形見波てあもひやまを
さに新治の神 詠あゝ[illegible]連歌するわされ[illegible]
なれるさをめゝ多多事のかまうそ社山ゝもにうこきな[illegible]

言葉乃みちまさゝゝ仁者のたのゝめるとゝふさゝ孫をさゝ[illegible]
多ゝいゝとあくあうすむゝ波わゝきそさの風色ふこそ

代枕集序　安永癸巳年作

玉石のまゝを寶ゝせるも我の見る所ハ片ゝに一瞥ふ[illegible]
草波ゝ岩ゝ多ゝさゝふあるとさ波を尋つゝて東漂西泊の
きゝみゝけるあぬ中にもふるゝふ中古乃風雅をさのゝ[illegible]落柿
舎のほゝしゝ乃ゝ多ゝ乃秋形ゝんかの花ふは見ゝ友古の
中ゝ利古人乃ゝ多形多すゝひゝをゝ[illegible]ゝ安おゝ[illegible]
あるを[illegible]生て落蔵師乃ほ田ふ葉片ゝぬゝゝて抜出せる
をのゝ乃をされゝ名ほ安て抜の事乃あゝ波ゝをも書ふ

よとゝひわのわ〜後法師八風雲丸の方をきゝ〜にわまとを
沈癖のものゝまゝてけるゝ〜にはやゝ〜乃冬春夜法師の
東行乃をもゝ〜一筆のめゝけれ〜後うまゝ〜くれゝおは
たりのかゝりをつゝうて屋ゝて持の帰京ふゝゝはけてゝ稿
をかゝ〜清ゝをゝてゝまゝ名を代枕集とゝふ看書乃悪
魔おゝとゝふい海めゝ伝る那ゝ〜わの堂乃ゝゝゝうにゝ後名
竹紙ふすゝ拍あゝ〜やゝおゝふゝに雪ふ〜乃枕を掛て
淺草の里夏成美随齋寥灯乃ゝゝに書

鷦鷯帖 天明甲辰正月作

去年乃むつゝゝ庭のゝ免逗爰ゝを軒の雀ふかゝち
乃ふゝゝゝ〜ゝゝれは中ゝほゝ紙ひゝゝこの雪ゝ雪きゝゝゝ
をゝ〜ゝれゝ節ゝゝ丸ゝゝ紙おゝ〜ゝ歩歩人ゝのゝ〜雪
かゝゝゝ申いて侍ふ

ゝゝゝゝ〜〜我宿ゝ梅ふみゝ片ゝい

乞食伟集跋 天明丁未年作

乞食ふゝ〜ゝゝはゝにゝゝゝゝゝくゝゝゝゝゝ〜石山乃ゝゝく
ゝる末蔭のゝゝ椎はゝ紙の窟ゝ園のゝゝ去来叟ゝ嵐に
いゝふ歩横の柿丈ゝほゝゝ〜ゝ器乃〜〜の片〜栗曾良ゝ
わひねの木曾の橡持の外ゝゝ〜ゝゝたる花姥捨乃

かゝる月ひ添ひあつめくて津々に風雅のあすけとなり
袋のおもし重厚入道を加りて竹窓のはしを辭して
身を順礼道者のまよひにはかりて東坡居士か上へ玉皇
大帝に扶を請しへるもを悲田院乞兒と梶を並せむといひ
乃む和漢同一味のおすきあるへしやあるに楼の紐をとく哉
ましみ　淺草乃隠人随斎成美

非仙集序　門年作

或ゆふ左列仙傳といふ文をみ侍りしに石を打て羊
となしひはこ乃中より馬をおせ級を舟らしてあみまうひ
風をのりもれ不あらしておほそらにはしるあとすゑてあやし

きゝる百千なりけれおそしろきねぶりをわすまじて見も
てゆくにもの中にかゝれはとわたり行之かぎれにわ残くかをり
はふる者のそうもとも法しれぬなりしや屋うつくしく
ひのいでゝ原より法しめ見しもとも津やくちりしかゝも
なりて居りて奥津さて雲ぬ男ふに文よくかく人乃筆に
まかせたりはしらいふあやしくも為へわもたり是船すし志られらも
文章に實なくを定くと数ふ人は免れなるへし　わりゆのめる
俳諧乃みちもおまに於なしくいはくゞ風雅の實を捨てなりて
あるに一時のいのちを惜ことなりて後をまに為にさる人なく却り
ゆ支待らむかその風雅の實をいふも梅を咲はやさきれとゆ

紅葉よりあかしにおとらぬ變化流行のありさまなれ
ふく心をさまりてけてゆくうのおもふ法けて
いひ出る詞花言葉を八重九重ふい添ると百しほちしほ
我が作る身を祈馬をはせてろろろこう
作りて浪をはしるを空にうけるあひを乞くすうり安る
をしけふかしと同枕の人等おもふをうをてなるく俳
諧の幻術ふ枕戯しあまふ一しとつふまとちの形を

一夜流行奥書　天明戊申季冬作

浪花遲月上人將探奥羽之勝掛錫於余隨
齋一夜篝燈相與作擬古俳諧至明得若干

首蓋余之於上人碔砆與美玉其復何論也
但志好之所同或可以附上人驥歟遂鏩以
示同好焉

浅草集序　寛政己酉年二月廿一日

かい反ヒすりへなふ新反故をうらや紙の捨れふハあるて淺
くさのなる稔のすあふ穂ふ長蕭子ゝ野をふ叩り
うふとまふえ〜古人乃はみ殘〜多糟粕をかき法けい
多料紙とふぞうけれみちおくうれありふえたる作意も
ふくうれの雲耳ふたれる後のふ名はおほつるふ紀言のそうを
つら称名まるいまふひとも淺茅まら見ふうすく作ふ

ものをや芭蕉集の趣形〻し〻

さみだすも是序 円年作

西をさす〻ぬひのはく〻東を善知鳥鳴くなる外う浜とあろ

くの水のなるを山乃多すまひ是ほくほく きハかきるれ生と

おほくの年脚病ありて一歩をすむるよう〻多にし

たう〻ねをひまり原くもたう〻けれを玉くの乃すき人う

びおくれる発句を書うめて紙中ふへは是をよみはく

山水乃清音あるにおもひよそくてわりこうて東漂西泊の

心を原るかのおふはう〻か禁足旅紀ハ人をたてくおもふ実

う至るおれを乃のあるう文乃はてもはをもぬうされ

風ていはうをて多〻ちに其の處をそんその人う物りふ

さうちをするなほけてさ〻のもをとりうすを白氏う

経年不展縁身病今日囲看生蟲魚と はうれ〻う

おもひうをてあをなはれのくは他意ようをてんを

多はをありをいをかはう〻乃う〻のおくの花もふほふう

さうく沙漠乃されのわ〻乃中山の月もさ〻ろの泉うう

なむさ〻紙みりうひうりかう〻おをもうの多をや俳諧独行

の旅人隨齋夏成美なを

送遅月上人序 円年作

梢乃面かゝはの里ををて紙松嶌乃浦ようあをを

卯のはなれの雪をふみほろぼしきすに笠うちむけて出る門人を
浪花乃遥月上人なるもはるのまつれふをきておりふしあるを
去年の冬なりしんわう隨斎よりはつみを給てすゝき河を
木ゝをきゝ三はるの雪ふ芽をこもふゝて風雅のまこと
つゝをゝようわをいさゝう峰々洋々の音をきれを はして此
春を根岸の里ふ鶯をたゝるを葛飾の梅乃ひゝらを遅と
おもひ上野ふ草乃花のふすゑ大井ふ川乃楊のさゝうも
君いへをわを和ゝ是ふをひゝけをはゝをゝとうるのさ
はゝ新乃うゝちにゝゝひ響のふをうをゝれぬおもひに
別ゝゝも萬花多ちはち散はをて世あゝとわう葉の

ち海ゝ不・雛別乃袂をふほる斧をめをゝゝして 弦を多門
をゝもわうれをゝゝもゝに屋ゝゝと心をゝしておをよに
世の中ゝ風雅をゝうをてゝ玉めゝうすゝ者を多におほく名
利ゝはふれて山水ゝ眼ゝうゝゝ上人名ゝ利ゝのはゝひゝ
をゝ浪ひゝゝゝ西行宗祇の足跡ゝを多ゝ奥紙の蕉乃
旅はゝふひて東奥にふれゝる俳諧のなをを云ゝひて貞享
元禄のむかゝゝゝ屋ゝゝいをを四ゝ世をふゝれを人の世
をゝ移ゝひて求ゝるゝ多ゝくひゝゝゝゝ実ふ泉石をもて
はをゝふ人ゝいふ屋ゝ君ゝゝ此人をもて杖をめゝはを草に
ゝ世をゝゝゝ乃のひゝゝゝにあはゝゝゝゝ人ゝふ風雅の正道ゝ

入唐したる上人の風格をうしなはずてうろたえ
ものすくなうむもうをもきく深山の人ふるまひ
きてよ孫ふものを待れ乃松象潟の月

毎月七十をこえふきくみる月移りたりと氷室の氷ふる
あるぬ酒と酒とて一杯の毒を生ずれの蓬莱のいく茶も
さすり求めるうくうく

九ふ一日不二ものをうおもひう那
やうと丹後いく春秋の寒暑を清くへき具七種を数れもの
ををへく幸祈

寄杖

つくづくに清ふそうそう霍の腔

寄団扇

風ふるるが玄扇と老もうをまたな舞

寄紙

夏菊やふるまうかうのいくかさ紙

寄酒

一夜酒かくけるうた醸 九ふ

寄綿

ふるる月や孫を待つうく雲 氷

寄炭

ふとしへを齢をなるる風炉の炭

寄韈

夏冬帷もちらくも踏敷風情

寛政元年六月一日

實とりよ　氷砕くを　ひむろ守

此句を以つのむ〳〵ちらん我男ちう世る時嘉文の示し給ふ

辞なりこの句を冬れ氷のうち月うまて踏れるもちる

人の故ありうれを実を失さるかくれちく せよ

とう庭刑なり〳〵豚児包好後改包壽佳例ふきのもく乃ふ

首服をちうふ我恵るるにようて示に屋き河なるれを

多所一家の氷をはたく〳〵持の心を片うにを礼包好こを

されぬのちれ父の教なりなるうくてお祝をあにするる

ちくふき閑にのをみ氷れ上をふむちくちらくも汝の

心をうしちふ事なるれも也

なるはもを室れ氷を清きを

寛政改元年六月一日

湧出臺記　寛政庚戌年作

臺あり湧出とよ特のうを二万由旬碧瑠璃をうれうを

少〳〵雲煙を陸にめうう月乃ふちくよて星乃抹

陰ふるをもけまるもむしをおの筑波山あるを後にこの屋をく
涉江川のなをれハ足はしひきぬへしはかをわう狹室
暑をもの屋にあるを形くある者に所をはるに所の者ハ
さの屋のうへに小文土居をうはへ板をわうし庇をはしくこを
はるうゆふ屋くまをにのうをを三日人う涼む屋をわうハ
心安かるむとハはをを物のをよくせむうをうをうておのを
ゆうをを後工乃ををうをうをなををををむうし淺草大工を
ハハ赤繼ハもきをえある物の上を乃すをに付るをゆを
鼻ををめうしていををうをけうひぬかくて木をを足を板を
ををハせをうして屋をををてををうて屋一日うをうを造を後れを

後ををにふをわを出たをむ世におほえてをみに所文字をもて
号をををて暑文日ををに陽爲西のをやしに新おはるををう
所うをまひのををのひ後をを毗耶居士乃室をうハを世
的恵上人乃松の床ふをををは屋ハ所れと世乃をををうハ
すみをくてををを塵外乃おをひをを屋上野淺草乃農
をるふをを後れをみを川ををのち山乃を寺にかをれて流の
をを所をををを市井眼下にあちをみて夕をほの
花咲乃屋をを家をを乃蚊屋をたちのほをて雄のひをきを
雲端ひをきけを世身あちを後ち仙ををるをををあをを独坐
安言ふをて塵腸を風ををけををあをを安ををひををあをを

して酒のこ狂句をかる祢々にかゝれる爲は得意乃衣を
ゑへく新ふ花ふかそかゝもわの爲ひて見形てむつま
かの長明の日野山のけ乃すゝもなほ車二梅乃わけ〳〵ひ
ありとみけかゝたふを大て奥に成る人乃ゆくかをめくる
めくるのゑ屋乃ゝへに安きゝあてのわり居るいせ松務の
なゝ木乃ゑゝて はい居てゑゝ馬乃〳〵あれもれて似をゝと
ゆゝ体わをゝへていふ昔天地乃崩墜をおを侍ゝ者あり
かゝへ乃人されをわらふ子列子世ゝるの者をゝにわゝひて
あゆゑ世ゝ行ゑふゝけるとなんを心に ゆゝむやゝゝをゝれ
もゝゝゝ臺をゑのゝひて けゝて ふゝけゝゝゝゝに

似をもゝゝゝ生滅無常乃あり爲あれゝをあゆかゝすも
けゝけゝとひてゑゝけゝわゝひて爲みぬ

愛土瓶辞

はゝにすむ爲よ一爐を侍けゝ乃土瓶をけてひ祢を
す茶をすむあゝ百六盆をはゝて後ひゝけ松ゝ
あゝ鉄を古ゝけれを繡乃気物多利に多ゝ成洞まと
ふほひけゝを真 瑜とゝふゝ世ふ今めゝかゝむゝを
ゑゝゝのゝ質素なゝをゝ侍ゝ墓爲ゝゝ爲ふ
なゝれてかゝちゝ心戒侍郎乃ゝつをゝれゝ似ゝ爲
茂蔓をかゝゝみてあふゝけゝを進退を自在成

土気ならに水をすゝめしかハ脾胃を虚しなりにたりき
あり炭おこり茶わく時そこはかとなく声を出して忘られと
きこえ松風もきこえ西上人乃よしみる雫 能阿ほうしの
宿乃あられきくも盧山竹樓乃あはれおとすておもひわたりける
かしこき人の書をひらきて古人をともなふとや酒を友
とし琴を友とし竹をともとして此君乃名を清たへ松を
むかし乃大夫とよわきハ此士翁乃うちにあれを愛し
其のおとさひしきをともす閑を友すも渇をとゝむるに
多れはをえて茶をいれて蟹眼連珠乃候をもうかゝひ
るほ一盌をかたふけむはいへもかまとたゝく声すなる

三猿箴 寛政庚戌年作

をはるゝ文もみゆる兄を久二と呼ひ妹を糸とよふ志かつく閑を
得て机によれを座りてよくよむひとの筆を握り書をちらし
あれをすりてさしいてひて作らむかたとすれは次まて白眼を
見ませよりて泣おちて耳かしはらしまなこ妹もなにせんやと
愛せしむかしの人のおもひはなかりひてはやにはかにしく
ほくみうちにひなかなるにおもひ出しむとうらみやる新
おもある所に出れた門を打ちにれ袖をすゝりとなりとかる時を
さ次くれにるこれもの兄を妹をなす忽妹を左りかく
のせて三猿乃おもひをなす其のはなかりけり次之人を

眼をふさき糸を耳栓かなしく家の中に坐して口をおほ
うき三戸を閉るといふ庚申乃夜の祥すうとあるとそれ
を三猿乃あそびなつきて紅三暮四にかくし情戯る
かの五禽乃たとへれよる心を屈しちふきを使さまるを
使はくくおもふ久うしくはなる眼はしの人をも
なるふかるの色をうんていかを目ふるをはるあを まさひに
身をたつうる法なる小姫の物の情をるほとまきをうはいのそう
おほなたたれあるふ耳ふきて花ちうの法ふ人のまと
のをゆめきいるなる五色を人乃目をひ五音ハひとのみくをひ
せしむをを扱れをはるに益の弁をあるて人とあるをひ

或をうるみいをうれてくゆるるあまたくひあり犬乃ようく
不四をとうしをせ法人をよを物いふを賢とせ法とうや
今ようは物いをはるの乃うをちをわあ身乃いはしわやて
なるくくいをを身異乃ちくくあるうをめむをやて三猿乃
箴かなてうかいはしめかいうは二子ちわうちあを
はる

題湖了閑窓　寛政庚戌年作

むうし芭蕉乃翁晋の渕明をうやめる句あるを曰

窓あるうをひる森乃墓や簟

湖了主人かけうをうをやみてひの乃窓をひる

はなに酒をあたゝ狂句をこのゝて林をふくみて風を
まち句をはくりては月をむかふけ〳〵に景をわすれ俗を
うすきてみゆる羲皇上乃人なるとゝ多うる醉て初ふ
れを次ゝ象階を爰ゝ白むをそ多ゝらに筆ゴ[illegible]て
玉をひ絃ひ珠玩ありむかゝる浪や白河の句を沒て世宗に
面をけゝすへ〳〵とわきまゝ[illegible]ゝやみをゝ[illegible]ゝ[illegible]
世すをあるゝ

世にをむく宮や心乃多ゝむ〳〵[illegible]

一。日湯治記　寛政辛亥年作

夏乃末ゝちけるゝ山中をけるそわかれしゝ法林
庵ゝ鑢山乃蔭をおもひをそ一日湯治とゝ[illegible]ひをなに
大なる湯ふなにをみ川の水をくみ入多田[illegible]の葉をむ浴ひ
てゆそゆのゝをはをふわゝ[illegible]ゝをけるゝ[illegible]ゝ詠る
塩とゝふ[illegible]をおほく加へ入れをゝ暑濕をけ[illegible]ゝ
涼をひをゝに治する同好乃士六七人句をゝ[illegible]て心を
屋ゝを化を求て座せる人〳〵乃一日の[illegible]ゝひにかの
やまひをゝ[illegible]みむとゝふけをゝ[illegible]ゝ句集を
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
山居乃趣をゝ[illegible]す鬼貫ゝ禁足紀行の倒をおひ晋子ゝ

新山家ちかくひとり似たる
夜篇も温泉乃香とかうよひとねの邨
主治 古をかうして薬を散〳〵今を以ひて氣を
和し〳〵肉をけゝきて食をもつめ庭をあゆみて
筋骨をかうすなり吟稿を一洗せて
さらに後乃很意いよ〳〵めでたくしく
あるべしこれ樵夫夏成美也

海嘯記 寛政三年辛亥作

今年八月六日終りを風を吹て家をやふる
恒を為すなる故特の夜東海乃水をうり陸き
乃ぐるさと巻山乃ふもとに来て津波乃ふるれ〳〵来りて行
徳中河洲等乃ひくあるを見る中に波乃ちをと形れを形わさ
きひをけるを見れを以れを及ちをに口をひらくひあす
ふうり〳〵或を影のうへに陸をうをあけ枝ふりはうて
わりたに命ひをを為すれ魚をねを以かてうをうり
をを為にわるねをそひあちかあをうれき妻子を流を
ひうを老うる者を浪ふうれて流るいのちをうをしと
あるふに為すす悲ひあけく野乃虫の音
くよ起きえけきたてしうをみる秋乃世人のかをとをに
うう跡うを侍者ちを十人の中にひをとふうなるを未終の

たくさん釣り出すものあり。海に入ぬ魚まく
乃られる命はけしえむこまるもまとるとはとのすき
ふと郭は死たりきに吹うて禹乃ちるもほとあたる
まく井戸人あるときくもむなしく帝こるるなり
世わさをひて乃ちまるす伊豆お掃安房上総も魚て海小
さるる法師さ山ちる紀ろるも山津波とふ事に尚れて人
和ほく失めていよ小を安るれひ民をやきうする
御改まるちて乃きひ板をあ吹たのめる中に蒼海
何乃いわる事乃ア乃れ波乃ら紀めいみるるを天地
不仁ア事て人ふ魚膾となるぬ世お海海ちる紀星く

夜にいるりて まさ火をえ乗老女のわらわ形くけひとふ
家秋ちにきまえ付ろうを見を笑に身乃毛吹ちち腸
ふれちきれぬ魚し 和もものこわる人ふ人おひし海乃
山里もあるねを陸ぶ方中の変に栖をいとまひすきちひを
求てやうくまこ法さ付ろてまさあるあれるるわさなる
乃る まちまひて福乃ちる而ふまを かくて世の中立なは
らんちまる家吾乃ろ山ア立法きいうるアまにきるひて
なる四文なるむも陸の乃ろ事ふまと形る屋し

浮海松を拾ひかかて庵かな し

秋法支ぬ魚乃俳とるるまるく

家よ人なく人に家なし秋乃こゝ

奥羽記行跋 同年作

鶴ヶ岡を過ぬれば鶴乃浦の梶の松陰干笠をぬきかさねて沼乃花かつみを草鞋よむすびてわふ乃花象潟乃汀よりの所乃ねぶりをすむ志ほ乃ゆ形ゝ涙南部の旅屋ゆゑに泊をもとめ飯夫う干嶌をおりひ原を酒田乃港湯にて茄子うりの小山をけるゆにをゝむ山川九千里をわゝを処ゝ乃風土を多のもて俳諧やゝ七百句を保に梶の日記といふものを閲するに彼地乃風色をす紙よりくめ

日ゝ乃おもむきを日のまゝにそゝ多ゝけふはゝ日ハそれらゝに多ゝ涙ゝ多ゝ多ゝふ原日ゝ多ひねも陸ゝ夢路とふ原ゝ梶の志ゝに一茅加へゝまゝふゝまれをいまの去来庵宗瀆法師茅ゝふ新ゝものゝ涙ゝ原の師人随齋成美なゝゝ志我翁曰芙寺蕪新乃多くひて多ゝすいにをひゝくゝるなゝれゝ

塵取集題辭 同年作

古調宇老人のかける家の集めくもみゝゝを涙ゝゝを多ゝにみはゝゝ影ゝてゝゝゝ雪ゝゝゝゝゝゝゝゝゝの葉乃ゝゝをかゝゝめて心乃ゝゝれ家の山と多みめゝゝ陸ゝ

芭蕉翁の風雅ハ佛祖の肝膽なりや後の頂逸傳の贊
辭まことに多れを俳諧乃緒語をもとしてあつつ五
の蕊をとゝへる心まるゝやをゝむ〳〵その光金かゝぬ
さとをれわゝ〳〵附老人とはゆゝ連句して見非を
論し左まあ〳〵きひ右さつゝねさ〳〵多ゝふれも二十余年
のゆめけあまゝけ卷をひゝ紀て多ゝちに目のさ〳〵ようかゝ
ゝの子いまの調字又乃業のもの一言隻字もおゝ多ゝに
ゝ十多ひゝゝひ多一亜ゝかゝ世る志のゝ紀ま感〳〵かけ
ゝのゝけ多ゝもるつゝきまゝその求ゝ世多ゝ世ゝこの
鄙語を加へ早

めに〳〵業ゝかまゝもふゝ昔

默齋記　寛政壬子年作

石ハゆゝまゝ色をゝ〳〵とあもひゝゝ形〳〵の名をゝけかし
ひてみけゝ〳〵然高と名のる者あゝ幸士志ゝ法ゝを出て
石やのすゝまゝ風ふゝゝひゝゝ〳〵武藏乃〳〵なけ多に霧を
わひて秋色ゝけひゝなゝゝ世ゝゝの多ゝ乃すみゝをもゝむ
ゝゝゝ俳諧の風雅をゝのゝて物すゝゝ形ゝれゝゝれゝ
ゝれ長路ゝ方丈の糟粕をゝ〳〵ひゝの奇をあ〳〵ためゝ〳〵
ゝて多ゝゝ〳〵乃ゝ業をむゝの中ゝ多ゝゝふゝ世ゝい

心の泉に垣ゐひまなく六の窓あるくやうにて僅ふ十七字の低意に趣をめぐらし昔あるゑん人の世ばなれうゐきをいとひて俗の中にはけ入ひるに哥よむといふ風雅似たりはなはだみるふにをひらく浜世事をいとふたちあをうゝすゝあまくいひなる句あれとうあるゑん人乃耳を驚かるゝ人の心をけうゝにさまを一路雷乃ごとくやいるる角ひなるゝ齋を空のおく所にまとひて車二輛引うつまへ文わはるひまゝ花まを赤向よ居哥 上野淺竹におもひをはるらはまへ南にうけて源川みつ流こに船をあるれひ夏を空てハ廬山の雪をちらひ雪をちらてゝ

呉天を新にさゝむその心中むろくかきうあきあとかく乃ゝゝある人のふおほよそ人の氣質いその山の險易と特の水乃清濁ふかちふうのあるを特それみすかるを形のゝ玉ハ出地ふゝく懈ひろを山川の美あるゆゑ乃ゝる物おのみ此人をも出せる形ゝをはむさゝひ浩きゝ乃ほうてゝゝ廣莫の俳諧よ乃そむ事ゝあてあゝ特の人姓ハ某名を葛三郎紀法ゝて好ゝまれを 友人かはゝうゝ夏成美あを

柿枕記 日年作

嵯峨乃柿の木あゝゝ山の乃ゝ紀風よふうれて屋根はゝ乃

おと唐ハ津ふかき書乃味ひしさをうつせし唐の新ちく
植おける柿の木ありしかさ秋ふかく魯越の野分にもやまれ東
叡の吹おろしにゆるみ花おちて實も侍らは菓子あらくと
あほれていまにほとなくかれ果ぬ社木乃なさけも無なりはと
あるしさびかる揚範か斧をめぐらし妙観かかたなをとりて
切て三股と那しなほ津けて柿なりしやらふ顔子か名の
ひたしけは清氏か梅さてもゆ一物よりあし来れ里なり
卧月に涙めるに以ね時ゐに歌て句たまとめ情をめくら
すにたよりあをむかし詩る人の文字をあいかす　三上にちと
いひし馬のうへハ牙體しかるあら頌い清ひなつた詳な清かれ

われハ多年枕のうへ集をそ夜のしるへといひ宿主人も出もす
一瓢の餅をあたへんは

句合跋　同年作

僕をいましめて血を洗し和氏か玉ハ津子にあれとも是をしるも
のをすくなしとや いふめるむかし西行法師ハみもすそ川かは乃
うたをあつめて定家卿に判をこひてよしあしをさため
来るわかかしこしにすなはち素堂老人もかのほらかしか
詠ずるひかされあまた句合して今の世に定家卿となの
むへき人なかれとそ判のことなる侍るいかなりかなで好
悪をわかちぬ素翁かことをわすれてものを似さるものを世人の

襃貶不屈はべりける源士乃あるじ法さしはもはべ
まうけに多れの人うよく冢〻洋〻乃書をゝ物ひ玉文はべ
んやいア此日序百句は題孫はべひを五十にうちあれう
瓜ちゑ一せきとおうゝ新わを俳諧のたちふれてふるを
ゝを心を入はれとも師もなく友もなく文うしかを舌乃
はべとわう句乃推敲不なふわはべひはれをまて物さと
めはをゝせめ紀るおゝを加へん年〻ハ不おひもちゝに
ちゝちゝを沙はべいをむも遼東を豕をめはべしと
おもひ燕國の石をあうゝせ新ひうはえをるゝむを
ふゝひみゝひ辞しに象をちゆゝ物ゝれをうをめに

おのきうさのむ所にはゝせて此はべう勝劣をふう年ハ此をえ
えせ仏ゝまうをる者ハあるまハかちうゝもおほはべうなく願ゝハ
女牛に服はゝれうおもひふかのあゝ玉をうちうゝうゝむと
ふはべしゝも牙におひはべる陸しわを中ゝを定家郷の
鑒識ゝ多れを耳ゝ山のみ形ゝゝ人をもれいふ屋
きもはべふゝちはべしのはひゝをうをあうゝすゝを

一鐘集序　日年作

はべくゝとゝのをおをふにうちうゝてををあをれゝる結乃
おとうれ鯨音ちをくゝ吼て秋乃ゝ呂はべ法さふく亡居士
一周の往ゝをおゝひて冥子巣兆懐旧乃集はべるゝ新句を

はしめにすゑておくり人にふるさとをたのしみ友とちとゑらひを
ひらめ眉をたゝめて句ゝの特変に方すをせむまゝ春秋居よ
はゝゝて居士ら耳をうゝひ居を陸ゝ生おの知もうけ
目の肉へよゝうゝて誰くゝもあうたをゝおふゝ
されて者をを乃句をゝうゝ菟路の鼓舞を梵唄称居
かへんゝ晋子ら章形くゝてうゝるへれといひ五老井ら
手尓波をもてうゝなうたまゝいひゝにゝ陸むて居りて
極楽聖衆の音楽ゝもおりひようゆるなるへしわゝ千住
の里にひゝ歌うゝ乃拍ゝるをゝき所ゝ蕉翁のふれ
おと巣もおりひうせて多ゝれ魚のなゝをゝ片へ一味平

等の手向乃かすゝ形ゝぬ屋ゝといゝ片ゝ特のけめに
巻をゝる

潮来集序　寛政癸丑年作

世ゝかゝれゝる人の後のゝかゝうもはゝへかきもうむゝ
特の徳乃あふをひうをゝれおふへゝ片るゆゑなる里かしわう
芭蕉ゝれ翁一箕一笠に死をかゝて杖をゝけ草鞋を
居ふを泉石の間ゝおりひをゝるめゝい称ふゝくゝて多を
卧むゝわひ果ゝ西上人の抖擻をゝへゝるれゝゝはひに
浪花江乃芦ゝれ巣のゝきにかゝれゝてゝを既百年の雨を
かゝゝ多を特の道を陸ゝるひ手徳をゝうふもゝ多陸をむゝへ

神をまつり昔をおひまのをけらの形〳〵東奥の一草法師と
はなさせのひろうして法師におさるの弦をたゝむ千里の逆
旅をすゝめ空にひらせあるまゝ鹿嶋乃浦に杖をひゝ
きいて板ひたゝいるおの乃けをすちむらゝありておもゝゝ
笠をうめゝ〳〵その里乃何某と以俳士多ひ人とわゝ名
ちゝんむといふ翁自深乃多んけくを手にひめもをうしゝ
けるゆゑありゝて法師よりちんぬほうしおの袴を切ておも
ふに此屢ハ其のかゝ根本寺れゆなゑひと翁の衣をぬゝ
けまゝ〳〵安ゝるゑ月かゝ〳〵かりおの句おの名乃わゝの身に
ひゝくとあゝ法ゆゝに学くゝゝ〳〵けるくおほえて記とす〳〵

報恩のおもひをおこし〳〵記ろく同好の輩を勧をゝておゆゝ
此月其の地の長勝精舎ゆ〳〵かれたむけくを塚ゆ法文おめ
送章を石に彫りて百年の霊をまけろけまをはけ〳〵しられ
ふるとけ〳〵昔を以法にうゝせを枯野をめくる其心をうめて風雅の
神のるゝくゑ其ゝるゝ〳〵乃法をむるを称ふゝと於雪ゝと諸國
の好士れ句を記ろひあゝふゝれけ〳〵ゝきゝえたゝもゝうもゝと
あゝめて其れ名を以ゝ古ゝをゝよゝ此地ゆ〳〵其因縁ある
事を遠近ゆ告むゝけ〳〵をゝや是身如芭蕉中無有堅と
む〳〵元禄乃風ゆ尾道裏にかれゝうと以へゝもゝの石乃
文字あるをゝ多い人乃名のゝち次法〳〵きほうゝ〳〵風雅に

はしめる事乃俳諧をなすこと隨齋の窓乃もとにて彷彿の野人夏成義

南無佛集序　月年作

いはゝ百年乃むかし一束の芭蕉草元禄乃末に花ひらけ風雅
の道と申へきも一味の素世にうまれて詞の花をひらき
實にこのほとりの墻をうかゝひ芽をわかりものあれこれ
めくみにうるをあれ共はるかに百年の忌辰に際
て報恩の集はるかのひろ葉をたゝめてこれをすゝ
ぬる所なるへし中ゝも淀川長慶寺ハそれ昔翁乃遺
墨をうけうてこれを乃發句塚と杉風老人のなけき地あし

舊跡なれはと津輕乃負松吟友を會しかのかゝく懷昌乃
俳諧をひきたゝみうけ法家の句をひ抜ひて集てあむけ
る負松遠く鄉土をうれて都下に門生をひきるあ浮
風雅をひ抜あむ中して此地に杖をとゞめ此時ふあへ新事
乃ゝ抜こはしけも因好に告む心をへたゝやこの集を
なも佛とたのむる事を文辭にたゝる翁乃採ふられを
やをわるみ成美此頭号をかゝふに我等小根小樹の
ゝ枝ひ葉てもなく芭蕉佛に歸命せて平等法雨乃ゝ
ほひにうるをしてすゝき等乃うて形るも古抜を
あゝはゝめむるかゝ抜るゝむるあを陸と此地にすみ

古乃時よあへ所れたるゝ後ひゝ法と形きをわきまへて
柔のかれ葉の志ゐるとに禿筆紙ぬゝして書

早苗集序 内年作

みちのくに志のふ乃郡にうまれる翁をたゞうるゝ
世を遍昭寺乃れ麗の屋に すまれてあるをにゑま
はるをきりこまて世の人をて奥せとゝいひはらゝ多る昔
ふるを志らへ所掲ら乃うれわきあるゝ顕昭ほうしの
説も信夫郡とゝ所にをちすらゝ多みられたるをを
する形るをいへ是ゝ法ゝある説よハ是さに大昭る石ふら
ありてその石にすりもら後ゝ多るとのちすゝとゝふと

形むかし乃石い波を土ゐ中にうゝ入てゝ月ゝ不書面を
尺ゝはせをの翁奥乃おくみちほそ脛りわけ波ゝ比ゝ比
ゝ苗ゝ形ゝもゝにひうゝ志のゝるおりひをのゝ多ゝ比ゝの翁世よ
形ゝ多ゝて百ゝ年乃せうゝにあゝれるゝ俳諧乃ほゝゝみちたらを
なれてまゝかゝ乃むゝを志のゝ人等お海文中に治乃丈左
法師ゝきれの枝乃ゝをゝを志ひ奥羽乃あひゝを ちまらひ
ありまて要ゝ乃遺跡ゝるみゝを抜ゝきほひに志のゝ郡
山ゝゝゝゝ処に翁ゝ比ゝ多ゝの句を石ゝ石ゝ多ゝ後の人れ
今をゝ志のゝ年ゝゝみにのゝすゝの碑石を求ゝて ゆゝゝ
形ゝひゝゝ乃石をほゝ奥ゝ多ゝ石面縦横ゝ文ゝゝてゝゝ

たく浪むろにむかの津かゝになまこるかやあれおもふになる流の石
ふる河ありといふ楼れひや河なるへしとめて興して物にかき津して
好ける乃家におもかゝへ乃みちの名をもてなやせしこそ
すきにひらしかくしなほあらすを世にふ浪く世むや人
く乃句をえひ集にあつて年々しつひかもほのめかしむと
なれ稚ありて梅しをはしめに志る世をやかなるまくえちすり乃
こゝろれるさと葉をたるもむかしきの上あれなし心に
ちう浪さとあるをかける乃ゝ

雨月帖序　月年作

ふるき連歌ハ縦ふせ屋をふ臥そわけらふときおえしに

月のひかり夜乃おもかけをくるゝにめておもふ心を津きたりし
とかや楼のむかし猿を心やりして室を夜月やなつけてすゑる河の
都やなにまめる人ありかれ西湖を美人ハなそらへて賭て
けしにたし夜も猶さ奇なりと此ひそむをまれ風色ハ
おもひより人なま津すにそのふる河のあひだにかをふかなし
むかのみにかゝ婦も非ありて俳諧乃連句して心をやりけ
あおそり稚あるしけるおやかりてすゑるゝ河の居をかみそ川
乃ほとりにし河せしむかしもまたく南窓に月を得蓬莱ハ
夜をまくらはしめ乃まこ稚をたひの市井をはなる事
遠からぬ庵も上人の米うひ酒賣の中にかりなせし心あつさ

ぬるゝと同拍乃夫れ時こゝ来りて面月乃困をぬすむ乃めを
屋こ月はゝ歌も居あくて面を打く日も例乃狂句をうこみよ
いふ見を物に書らむるなるし乃物す紀ハきと月ちひしく面
清きくあるをうゝ乃おもひてくちうせむとあるくし雨月乃
あるゝ名を心遂おゝ心に月と面をもてうゝ屋して可く業戯
加ふるもれハかはしう乃野人夏成美ゐと

送乙二帰古園　日年作

みちのくの乙二ぬゝ去年乃冬ちゝ河の雪をふみて東都の
春乃あるふすゝはうぬ旅乃心もちゝのとめてよとわう
かつしうれ法林庵ゝ鞋の駕をうめてうと一日を野

外乃梅をけうはゝ乃日を深川の雪を硯ゝ汲て十七字の
風情に方すをゝ後五十余日乃ひゝ雅趣を
吐てのゝ涙ゝとゝされを乃ふゝとゝきゝといふもうは
諧るふちゝ中ある日乃夜話ゝわう口質乃低意ゝうて
雅情乃たらうをうこみゝすと論説を法華経のゝとゝ乃
源切ゝるわう肺肝をけ涙ゝ似ゝを道ゝ笠をうこゝかけても
古人乃ゝうゝ中いへれうゝ体ゝう乃たひうゝかくて
梅ゝを柳みゝれていゝ蓬窓のほたゝ乃涙を拭ゝ
離情ゝ中ゝ中ゝうゝ多く涙乃墨水のゝれうゝゆひ
けゝて再梭乃調をうゝふ乃

春はふ〜新まわるなり すゝぐ川
あすらや 悋乃ねゝに あまあむ

規矩録序 同年作

俳諧乃俗行ハ梓匠輪輿の人ゝ規矩をあらはるゝ如く
形〜ゝ本来一物なる心上ゝなり出せるわさなまこと一線の
おのひとやまちよ雪卑俗野鄙ふおち入あるひハ理屈裡を
はぬうきかれゝ至るけれと世に所みちに名ある人の作意を
かゝみゝておのゝゝふくきをあくしゝ門ゝ十余年乃
非をゝゝむゝゝゆゝゝ人のはゝ ゝあるきいふゝのはゝ

きゝえたるも机右に書をめてはれるむゝひて三復のあるひ
をゝゝ かの梓匠輪輿のきくにゝゝゝゝくゝゝゝゝゝひ
ねゝゝはゝくわゝ心の我心ゝゝゝゝゝ人の物をきのゝゝふゝゝも
おもてのおゝゝゝゝゝゝゝゝゝく諸子乃俳言くゝあくゝれを
いはまにゝゝくゝひゝつまをゝゝゝせむやとわゝ心ゝれゝゝゝへて
そのおゝゝゝゝる趣のゝゝゝとゝゝれゝゝゝかゝゝゝる者葉のゝゝ
きと於てはゝの師とゝゝゝゝ作ゝゝゝゝ心にこひゝ呂にゝゝへて
志はゝゝく迷中乃是非ゝ あゝゝゝゝゝゝゝゝゝ勝鹿乃野夫
随齋成美

かゝゝゝゝ集序

淮南乃たちはなを北の地にうつされて枳となると陰陽風土の
ならひにそむけるにもあらす芭蕉の翁かつてたひにあり
いにしへ平安のわか俳諧にはしらさるさきをきはめ
汁のおもむきも志をつくしとおもふに風調乃おなしからさる
いはゆる水土のかはりにしたかへは歎志かいへとも田舎にみやこの
てふりをうつせる鬘花の中にすみてひなふりをはなれ
かたはらにもゆるされたるもわか東都や晋子か豪邁
なるひとへに天下乃俳諧を推斷してお(ほ)さに酒落の
風をおこせしもそのすゑ謎字乃体なるあれ入てさく人も
いふ者もなく其の落處をしらさるにいたる中ころをせ綫

乃風といふもおのつからひ世にしほり唱ふるもあまたいへともおほくは
支考かしすゝめにして風格らしくてひさしく有野夫村童の
雜談にもあらすして去來を翁の風調にならはれし氷や水
昌との似ておのかものにあるる事葬乃苗をみるかことし
されは風土のならひにもしたかひ決心をかへてまさにこれを
なくらすに津に屈くる同調乃友なるも三人はかりけし
瞽古乃意く文臺に津もまる反故乃中にもその津かゝ
をよりき婦しくもあまは竹の子乃代々の化者の跡を
津おむかしにもかはらねとれなしまのまほ人くまもみんせは
おしくもてまたにのこし板にゑりて後にて其の集を

かゝるあちといふまれ実ちへ花さへかくさゝ紀むゝ人の
心乃色香をおのゝく神ゝらゐさむゆきゝゝちゐ俳諧の
多孫ゝゝゆきゝゝ見に出うひ水をゝきて牛をかゝゝ雲を
おのゝ紀時をおひねうふゆきいふ事を撰者ゝかゝゝて淺
草乃野人随京成美みゝゝに筆をゆき紀

書九一年後　寛政甲寅八月作

雪あゝゝ毛空くせむゝゝ紀き夜ハいゐゝゝと春乃ひゝゝを
はちみゐ月のはちさへけゝるゝゐ乃日を荻のゝゐゐを
おゝとおゝふ見を長ゝゝといゝむもむ面ゐゝゝ梅と
ちゐはゝゝ矣すゝとゝゝ矣のゝゝゐれよふゐかゝゝゐれとゐゐを

みゝゝかゝゆきせむも陸ゝむへゐ面冊一年の集を長ゝみゝゝ
かゝゝといふをゝゝゐ紀ゐかゝゝわすれて毎一日乃變化ゝ
ゐゝゝ事三百六十陸紀ゝは陸ゝめをゝゆを紀ゐ陸ゐ陸紀の
はゝゝ紀き心ゐゝゝ口をひゝ紀て笑ふ日五月ゝ五月と
いひゝむいひ紀ゝにおゝふ冊紀ゝむをゝゝゝ紀ゝ紀ゝの
ゝゝ面ゆ

墨水翫月記　寛政申寅九月十三

友をはゐれゐこかゝめゐねゝゝに毎のむ椎乃木原叢の
森陰ゝ十三秋乃月紀ゝ歩ゝ紀泰昌ゝゝに冊流ゝ
ゝふ紀ゝ紀陸毎のわゝゝゝゆゝゝゝひの新ふはゐゝゝ

なる歌をうたきもて畑こ庵乃門のまへに舟をうめ山片
ゐまへすみさ河の内見にやいふまをあり〜硯をふゝ
さ物ゝ茶を多ゆ さへて糸乃むし呂をやもりて観音
乃農新をひうして月やくれ屋にひをいり五百湾の
むし竹三めくるれ木多ちうすきう乃多ちまめ書歌
清ものあとなれとなは一輪のおにをてやされて百般の
媚をそへたをまあやや陽ゆち山乃あゝ雪い仮住せる
倡婦の水樓をかまへ月をひき寄をむう陽乃をさ後に
糸竹のゝくを行ふふ乃はあてをうておほく掉を
う屋すも見ゆをわり動きや昔うきに乃をて陽の河は

いをたまゝれおくるもれ行るさも杉をひ出へ〜牛鳴
ゝ鞭石濱あとかをへ行てをみ河はいるゝ乃月を三笠に
をて金波乃中に舟をうゝをを迷いをゝ乃に出乃音
けうにきあえねゝ〜の多を後くゝ乃すに僧されて
硯を新〜句をれりをいひ変を以ひ世の中乃おと
みをわをれてゝをゝく月中に身をおくに似る〜〜

わう舟や新と月を乃写りあを

屋うてすゝ河乃水を汲て陸氏う多一みをゝねひおのく
六盤乃奥ゝ湘水楚竹乃風流な新屋〜かくてをこひ
雲来をくるけををあり乃ゝうていい乃ゝ月のあを所をゝ〜

ふに舟中はしるをくはく淺草乃門をこえるに耳をおりせも
社無いの川はくるうハやて流るをうひて舟をくるる

後乃月をうちにおもてふけるを

おもひてゝ乃序　寛政乙卯年作

むうゝわすをうれるをれあるを弓矢いるめしく　わひて
馬ゝうち柔ゆくふみちのゆくてゝ屋をうふやをうゝ
歩おきをるを矢をうんてをるをいわをせたるとおほえれ　たを
弱きをゝ柱のうををみてさわをとうをれを　ゝて　ゝく法をたをと
屋をそうちの月てをを世帰るをぬをとわを法をはゝ　ゝ

すりて麦を法のうをて雨をりす法鬼をうゝ屋みて答を
わをを乾おれうをを子をちのちひをれをを子あるをあゝひむゝ乃
すれ人ゝう書れおをる白をを目をうれをあうちに弦をく
耳をうゝふけてをを法ゝに乃ををゝ屋ゝ屋ゝ乃すすれて
心をれうをうをくを法を一層乃をれを法をを法をを物ゝ
かををうをてをを法ゝ乃をれのをゝ乃ををををて法をををれを
をみ見をを法ゝ花鳥にうを法をゝ人ゝの心をけみして
世の中乃ちをのおのひををうれわすをを見をを法ををわをれの
大形るを乾形る屋し

散花集序

今はむかしはるまのくに鹿兒の里にくるまやの能譜
山李居士とそけうるる紀名乃きさえとる人あるとろいう庵
水無瀬乃和哥栗のくいをうたられ名をれを
ひて無心所着乃一体をはるよ形るへ　其乃栗とすきのちやー
ちけくるるとゆくはくちるとおのはうちをたーて蓋をたのを
校ををるものをくるうこに中ふをけるちの玉層法師ら
居士うひとくせをうはしてみの栗のけうきうれやんわく
角くもなり居士かのてけひらくくわを山水のれりひはをに
たえこひとをを松嶌象潟よ杖ひくなるはと笠ちー
陣いわうき波ちう住きるけうをなりうあとうちムせに

いへうーに病身やーくよおいまさうそのおとうれさこーて
はひよみれーうをとれむるーれ物ううとうれりけ彩
けをとちうーの春居士う心けーを果さむーて法師ま鞋
をひむうーにみてやりの世国ふいる居士うけるの尾て
なりてちるよかられ侍るるてあひてむうーをかるれ今をなけ
くのあやりかうりー門人よかうーひて日ちうーしの里ちれ
大龍寺といをうーに居士う遺章を石てるうりのの
人けううみ形うくうやるてのちくハ四ーしき古弘やも
なをての心をへるりへしーうの句
ちるはれ乃花よるとあるるあうーれ

榮落一瞬のけしきをうけいるまも法を待れるのかな
かの無心所着乃けちひとを形しゝ出しゝ来れるもれ教法の心乃
たうなきをもるものをおのはゝ〳〵知屋〳〵法師屋とて白河の
せれもるもとすれもの事乃ゆゝ集のけめに書法を
ゝいにけを多しく栄をとりて落花乃むひを多
往事をれをゝ

隱說

聖人乃偽を麟をを隱者の兆を鹿形乃麻碌音相ゝ
へを弦士をひとすゝ名をはく多に碌〳〵たゝむ
をのをを

右寛政卯八月廿七日曉天夢中作覺而不換
一字錄焉

贅亭記　寛政乙卯冬十月

かはしゝれ東江寺に多せおゝはを屋多〳〵佛を法の
を漆の國多田乃荘石峯寺乃靈佛ゝゝ五百年の
むゝ〳〵千戈のさわれを寺塔も鬪爭乃ちまをとなりて僧
俗も法をく迹ををるのをを乃号をを石乃ゝひけゝこめて
年月をいけゝを〳〵て土中にゝけをゝ世ゝゝ法の後
世中をの多をてほゝ出はゝ多生せゝをけるゆ忘ゝ多にゝを
をく故郷をゝはゝ〳〵ををゝ多ぬをて画傳乃趣をゝ伝ゝれをかの

石乃はこも寶庫にはたへて文永二年三月砂羅連山石峯
寺と名ゐ給ふる文字乃おなくるゑ侍るいとゆゑ紅寺
院少て土石わさとなるに物ふりるを拾の御堂の處ゑ茅
茅屋乃ごとくかりそめ住侍るの砌ゑと新端侍きに
はこひろ乃狹室を侍るを廣サ一丈にみるに東南に窓を
ひろき冬は日ゑ多をおひて筆をれめ硯ゑむゑ中に一炉を
うまへて寒を凌ぎ茶鐵を釜といへやも蕉素乃堂を
ゑゑひかるく紹休二子乃法をゑ侍るに堂乃萱乃屋
厚くふるて竹の縁板乃ひきかるても世にいかるまる
ゆゑて屋ゑうはるすはひて乃新を屋て侍けるなくなすす

幸ゆくわまこひゑるなのとおもひて世心人ゑなてまはるむ
とまて おろたにはるあれるを侍るゑ字ふなるを侍る身ハ
事をはふれ物をきくるゑしてわはるひるゑ文ゑをゑを
なし はるひにおのひとゑ人もゑるゑいるて心乃
うゑれをあてかを各用乃室をを侍るきをを人も
ひきみひひ乃新ゑ多に侍るを物きく乃いてきるやう
なきはとて屋て贅亭ゑ名はけるる庵に掛ゆ文
株を植て春をまり多ゑるを中に柏書 桐いけるもの
竹おとはゑるにゑひゑにおのはゑる木蘿おはくて
さのめかるゑおとゑるゑ事れを烏語ゑものいひゑるて屋く

雲乃木葉をうもなひやをうへに五尺乃盆池あり蓮乃
根をふせ魚をそなをも土地ハ菜にうゑしく水清くて青淀の芹
白鵠の栗も處につゝてうほしうゑ次家よハ蔺笥翁ゆき
子ゆうて出入るに法ゆもも杖をむうへ門ハ法ハ宮はき風
ちゆうなる日ハ雅子を為はさへてゆうもちるれかもに
歩をすゝむ法ハ淺ゆまち乃御堂むゝ牛鬼といふもの
あて安居の法師をおゝろうるといひはゝへしハ人め
なれ屋うゆもきゆえ侍るゆ今乃ふれちひいふもけゝみて
長嘯子の日記ゆも國ゆすゝて法みまるゝ書ゆ法ゆ乃
真土山ハきみを川よのそみて万葉乃古名をたたふ木母寺ハ

梅わら丸の古墳ゆみゆ法ハそのはゝ御茶乃旧弦とそ鳥
越ゆ天芸よ乃交をおもひ牛島に負觀の碑をありぬ葉平
天神を在中御乃竹をのあし吾妻の森をゆちられ姫乃
みふゆのゝちあと牛頑山ハゝ一の御前にやをを駒ゝハ
花散よ法ゝゆ新石濱ハ千葉家乃古城砂利場に實盛ゆ
石塔をゆる三圍ハちゆく晋子ゆ雨をあひはく波山を保ゆ
嵐雪ゆ雪をのゝ次上野淺ゆ乃ゆゝ木ゆゝいと
けゆくふれまきをは法ゝ家よゆへて独酌乃搭ゆ對す
ゆと やも人にゝゝをねをみそゆちられ 西ゆ月を
ゝゝゝく境界乃あゝくやゝて法ゝゆに業をゝゆて

妄語をあらためさとす贅乃おそ贅乃贅乃もとよりなり

四山藁卷一終

四山藁第二

隨齋夏成美著

豐嶌久臧　同
宋津包德
齋藤包昌
夏目包壽　校

俳諧小言 十則

俳諧をみるもきくもそれにはまて思ひを述る戯なれ
ども中に中昔まてふ多く粧言ひ乃ゝ比来れ軽を
ちらす昔ゝ世我翁よりはじめて詩歌の情をもて風雅の
心を俗体ひ云るもにありよ多とたゝ詩経万葉ハ乃

古体は似たるべしけれをかれ蕉翁の門弟子おのゝ
ゝ物するかとあるて道のちまたにわうれ糸乃い流くにみゝれ
たるもやうは以ひもてゆけを持のもゝくまなりてい之師乃
物ゝ一かゝをのゝはゐひうりせいおのくゝりに蕉翁乃
一体ゝいふ為く実に蕉翁を尊せるもれといふへゝ
見をたゝゝ眼くき人の象しふ獣の尾をゐて足をけゝりて
漆桶は似ゝり箒乃やうゐるといをむゝさくゝその象にあゝれ
ゝいふへゝねゝ以眼乃人のはゝとの象を足ゝるゝ大に
ゐふへゝ扨蕉翁の風雅をいゝをゝりにかの詩経万葉
なゝのゝり紀き草木魚鳥におほゝれおもひをゝせゝやうに

風雅の心ゐゝはゝておのはゝなゝ出せるゝゝ人乃耳を
驚ゝかく百年乃今もめて興まるゝひゝへは邪ゐき風雅の
心乃根幸に土ゝひゐ紀をゆゐは出せるゝ乃をけひゝ
くゝめはゝゝくゐゝゝを自然乃姿をゐ侍るゝ
その詞ゝ出りに趣ありたゝへを新奇乃ゝゝを豪邁の詞を
けゝけゐもゝのゝ乃趣向はゝるく俗意よりにゝみ出せを
外をゝさゝて内に実形くゐゝゝてゐゆゐ此乃ありたゝへハ
俗語鄙言ゐゝもゝゝ風雅の心ゝゝなゝ出ゝを人の心にも
徹底して鬼神を泣しむへゐも此乃ゝゝけれを古体と
いひ近体とゝへゝもいゝゝう詞の多ひふゝて風雅の趣を

けるにかゝるめざる所ゝ千載蕉翁一世乃化意を繼や
しておのゝ志ゝくゝ醜を西ゝ作ゝとおのゝはゝ向上の一路も
企至る所紀氏蕉翁むゝいへる事なと古人乃求ゝる作を
ゝゝめし古人乃求ゝる所をもゝめゝや南山大師乃華道を
はゝへゝる詞をもて門人ゝ示されし乃心をゝくゝおもへゝ
けるに未師を捨てあゝちに蕉翁の心を削と形を瘦て求ゝる
所を求ゝるものゝゝくゝおもむを深めて古き句ゝもん家はく
紀氏変句ゝゝに心をゝゝひゝりゝくゝ神ゝゝゝを通し
氏紀もゝゝ
句をはゝゝに至りてゝひて雅を求へゝすはゝめて俗を去ゝ

あゝ俗ある心ゝゝ家ゝに去捨ゝゝ雅ゝおのゝはゝゝめてゝ
ゝゝゝ雅ゝる趣めはゝゝき詞を求ゝるゆゑにその求ゝる所に
つきてゝゝや俗意ハ出ゝるなゝ句ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
なゝゝゝかゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
耳ゝて学ゝゝゝゝ
句をゝゝゝに心はゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
俗意ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

おもしろもあへて嫌ふ所なし人乃句を見る事叶はざるくして
たのもしく句をみむも博くかるもおもしろくなる所し
文章ハ實を主とむ奇言怪語をはなるも文章一扁乃実あるハ
木偶人乃めてくく持ちそなへて言むさやし發句乃おもしろ
かき赤ち形ち世界乃中にあり葉書する事と見るに大やう
哥物語乃清濁の形ち風雅を主とくぬるも物乃発句ハ鄙
言乃俳形ちかけあるすす狐乃衣に貂を接き合せ多むう
ちし古ちと俳諧文章乃筆格ちし蕉翁に至りて始て
其の趣をなしその趣とハ何ぞ詩歌文章乃實をし
なしすして俚語鄙言を博へる所とその交るにまと

心ばあるものなし俗乃おち入むるをおそれ所へ出へし
文章乃ちかきし俳諧の工夫多去俗乃二字よりすす
俳諧をもて終身齊家乃道乃ためて或ハ老佛の心よりよ
ちしめて言妙に説ちしもあるとしんぬね世の道をうく
ちんやして部てられる人乃識をもく俳諧はしにちう乃
物なしす佛説聖言乃ちしして俗中乃乱雑を述る物
なるい別に趣ハあるなり世の趣とハ雲をあるれむ
雲をうなめる人情乃おりひを物ちしへるにたるへて
文七乃ちと葉にをうちはね出するの形ちかくいたくやそも
くても戯言なれを以に主ちにまをていうちにもあるめやいふ人情

座うれゆ小道とゝへゆもも親り座交ゐ行ゆまゝ云下の座く
なゝ志ゝゐも侍ゐ侍ゝ
ゑ乎乎波い芦へて自澤ゆゝ世ゐ座ゐむとゝ誰もおほえ
ゆる事ゆて特れ侍て乃物ゐゝえ侍ゝ乎工夫いゐる座うゝれ
鬼神を活ゝむゐも多ゝてをその事ゐれゝお物ゐゐにいひ
侍多ゝゐゝてゝなに乃感ゐ侍ゝむおほゝをゝ乎の困ゝゑ乎波
ゆも多侍ゆゐ多ゐゝひゐ多ゆい傳受口決乎ゐれゐてゆ乎波い
侍ゝうなゝむ物ゐゆをゝのゐゝゝ常談平話をいへゝも
ひゝれ乃てゝえゐひぬれゆ特の趣乃きゆえ侍ゐふゆもゐる
座ゝ侍ゐ中に詞を世をゆて變するも侍ゐまゝゑ乎葉と

いへゝも詞よゝゐゝひて今古以侍ゝ乃多ひめゆ乃新座ゝ
萬葉古今乃哥乃中いゆの世乎ゆちひゐゝて乎はゆ組ゝえ
侍ゆをゝひてゆれうゝくいゆむ人ゝむひてゝを俳諧一家乃ゑ乎
波世いゆむもあゝ叮ゝし
附句い茶ゝゐれ茶ゝゐ句毎乃轉變叮ゝて叮くゝを定めゝて
れゆゆも一つれ理をゝに去捨侍ゝは無礙自在なる座ゝ
理をはゐまゝて侍ゐて茶句ゝ附侍ゝむゆゆいゝにおゝうの響
うゝ侍ゝうゝてわゝのゐる一線路を活ゝひて乃座ゐれ不を附ゆく
るゐゝ叮くいゆくゝにいひまきゝゆゝてゐゝゝにふゆへゝる
事れゝゆゝに侍れゝゆをのふ侍へ多ゐ座ゝうゝいひゐゑ乎物を

らぬ理論ありて蕉翁の名にてしるさる書なりと伝へて後世に
七名八体二十四体なといふも是等は初心のみちひきにして
僧家にいふ名目部のことくにてすこしも眼のひらかさる者を論
するに足らさる事なれは諸家の教方の絡をもて句を
求め句を法とならむとせんをくへるかへりて大なる妨となれ
起居し其のゆゑを風雅の心いまより理のなりなる物なれと
也理の外なるわさを理をもて杞さんとするかゆゑに水虫
上に胡蘆子を海なれかおほく浮ひまいへ多にこれ居かく
ゆゑかおほく理の外といふまきな所謂あり一向に理を放
下せよとふいへ見るなら理におち入理に縛されぬやうにと

おのつから居なれは伝書には附所を定め法式物をしるく見せなと
して付侍らむとは甚無下の事にてあらひも遍序題をもて
言をたて或は起承転合にあて又は天地人の三才になそらへ
なとせむはみなよく無用の辯にして附句の害これより甚し
きはなし
去嫌も変化の大体をしるへしとて是を連歌式目の古
法を始として御傘嗟草等の諸書其のむねくはしく法ま
ひろかるにしたかひて其の法もいよいよ深しといふへし
凡変化の道理をさへわきまへ侍らん文字なと侍るにはよし
居りしましは一句の縛変をよくよく心をとめて案しへきなり

第一八句乃好悪ありて片〳〵合を第二の論あるべし 古人變化のまゝにまゝけうる法則あるを手書彼書の空論をもて實地の附句を繫縛しかへりて變化乃趣を屈する學者まゝふ心をゆて變化乃事をさへわすれ侍るを一歩の爭論ハ屈みぬへし本ゝ諸書乃さゝあひ詞の數くいうる強記乃人物をもも一〻記臆せむるとかゝるゝ詞ハ無盡の物あれを諸書の法則も多分たゝその大綱をあけうる物なゝ侍るとそみるに古法を屈く屈きてたゝ

會席乃ありさ海いたも風流なるゝいうゝ花紅葉の借ひはゝえるゝいふあると西行法師の扇文臺さゝをゝ国調の友三五人花晨月夕におゝひをのゝ若ひうゝひよ侍りて情を尋ていとめてゝき花ひゝゝ懐紙の法堅懐紙横ゝ懐紙しのさゝきうる法あれを今ハ世の緘ゝ物にもかふゝ句讀のゝ人ゝ めてゝをひゝ聲乃ゝ低ゝ あやゝうゝをゝゝかゝ東坡居士ゝ三分ハ詩七分ハ是讀ゝるとひよ思ひゝうゝおほし

世人の襲貶けゝにゝのむ屈ゝ次下里巴人の和する者おほく曲ゝゝれを和するものいゝくすくなきゝ今ハ世の人乃きゝをゝゝあひてわゝ心にあるゝね詞ゝをはけ侍るハあれ世に屈のゝゝ嗚呼の者とゝ屈ゝ知音の人ひゝをゝうゝて

さて多くは伝れもすくなくふるき名くれ千峯の子雲を待むもやまをうしかるへしかく吟ず自讃の心乃ミすみて稽古乃害なくんやをありよ人みくれを心ハうく乃ふをを言れ所にをくけをハ格次第に卑俗すおち入変なり多し詩ろをもて人をおしめ吟むやまをあ次世上すに俳諧を唱ふる者ふをあ多ふておほむね俳諧の趣ををくに白眼放言してみをた他の人をなるその人いのはるを乃上手ありやとおもふ多はをおる俗士ある乃を多に人を驚し人すをされををいをれむとす此心ハう多をの俗腸なりや易すをれ者を易をいをくにまをふる

もれをいをくいふ者をををく源をを云ををあるを計乃を形言をいふあれもやをををををけをハ形をを

青蘿句集跋　寛政丙辰年作

世すに得ををとすあれもはれをあはをを海ふをれき事ををはをあ乃巣に見をもをを形ふをく火ねををを乃ををきぬをめをくをを花をあぬへき多ハ乃をを形くをををを多えせぬハをを繁乃みをををををを言蕉句集をなめる人ふう世豊世に乃をを世ハひをを蕉翁乃方すにををををの實をはあひをれをるを氷をを晶をのををかを乃晋子ををせをやをを時代苻絃をいふものを年屋をををを屋をををけるをいをく

風情乃ちからをはくゝせすおと葉ハきえ世乃いはれなきても
かゝる天山もこめ地ふひろひて居うて人許多うらやましきる
事あらるゝ紀わさ那るへしたまをよき見をえらむ人ゝ更々
まことの心をはなくへきかひの中乃玉をかうらとさかねの火に
いつそも唐萬つせぬはしのひり至るへきものなや　此集の
まゐ忽に一語をそへよしと壹な國まてきこえあしるいま乃
栗のもやおれ枝を乃心をうちせて勝鹿乃野人贄亭成
美書

句帳小序

應汀息需

みくしあきハまさ片ふらふちとよめる無心所着乃体なり

此体ふるくちらはりて万葉集にもむとひの牛とよめ季
今の俳諧はその名をひ少して心頭一物那き處より那し
出しきたるをもよく萬象をあ縁をあるる事奇なるを
といふへし昔海のさへ乃鴎をうちもするものゝ近かまゝ翱翔
浮沈するさひてひとをはくひてあく事那しある时此
かもめをやくへむとおもひてゆするにかの名ひとりもちゝ
よう浜して手をむすしうせるといへともみちお感ある事と
わきおらしといふ唐うれ此きを無所住乃ちからをもて
都不むうひ多あちにその心を生せを草木鳥獣ひとり
くに感格して色をもねをとうたろちかく啼かさよく乃

はるひもいつはへだてぬものかや

曙句合序

應道彦需

むかしよりいまもあそびといふをいはゞ萬葉乃なかにありして哥の心は言のうすくも後こしの韓非といふ人のいひけるよしなる抽象乃中き清まを詩とはいふさもいふもんはおのはるかなるひ侍るべしかの俳諧もまた哥の友ならひにして古まの姿をいへる桃乃はなさを鳥乃はなのみ梗乃さら枝に霜のきえたるのしきなし残なく清風し馬頭初見米嚢花はなな清しきのすゑまでありしておもての作意をかゝらぬくしあるひはすくもおくとも深くも浅くも おもひ

まゝしていひ出ゐれけるおりかし 詩六曰詩の國うしれるまいとも俳諧清くこゝあるべしといへども國とは疆界乃おとまて言葉のけちめをいふなるべしいそしきとあしけれもなく多く清く多からふてわくらぬ風れ手あるをや此あ車津のく句合といふは志のゝめ乃ほのゞく出て照ゆく雲乃けしたる鳥乃かりとまく小見あ車のきは多く志ほれ白ね軒のけしきに社鳥乃羽色のもてなさまてさやしくし清きる風くも折れをいゝて心のおもむれもおのやうにのわらの風変座うにいひ出なんものをさうし座みはく哥のなかあけぼのを名ずけよび侍るやうやうまゝ右ひらきにましはしをおきとわるるそを狗子の

佛性の有無をいふにあらざるべし然れども
いかもこれなくすんばあるべからず風雅の一佛性をうゑもしてれの花
乃春ふかき梅ばちの実乃秋ふかくなりていれ者
のさすもれれしといふ歌古人云唯阿甚相遠うんとこのひゝ
きゝの心をもてきゝ序の心をかす

野狐録序

ひとりもす茶をすゝり烟をすひて琴を弄するのみくいぬ乃
せくくせの〻日をたゝるゝと既に六万八千日雪ゝ来庭に
ちらる木のそれのみあるゝやあるいにきゝ是にわゝめゝらう
ふりはもるゝはゝめてゝるゝいとはゝなるゝゝをわりふをうく

俳諧のうゝれゝきゝいひておもひを原に此あさきも年ひさ
しうきゝいうゝ浪上ゝるゝもゝ至れるゝゝむと一大虚をはらへて
困くゝ乃作者ゝるゝ文音ゝきゝうにゝきゝうゝ句を求め浮をゝふ
今ゝいゝゝきゝいゝゝむゝ中くゝ人めゝうゝきゝいゝ口ゝまゝを等に
ゝきゝうひて書もやゝきゝひをあゝゝ三文字いゝゝゝゝあゝひ文
なゝゝゝ彩もあゝのはゝゝ杉はゝゝ原ゝ佛諧ゝきゝれ一定と
れゝゝゝいい一定不定とおゝゝへゝ不定あゝゝきゝ孫くゝの他者ゝゝち
ゝなゝゝ俳へて家ゝゝをゝゝゝゝゝれゝゝゝれゝゝゝゝ
ひゝ一持語をゝやゝゝて五百生野狐身を陶ぬゝゝゝれ
あゝゝゝなゝゝゝきゝを紀て己心乃面目をゝゝゝゝゝ家

しかうしてさせし年月乃懺悔せむと此事をはしめに
書て文音乃法好士にさとわる乃ミ

句帖序

あをもて水に清きかけをかゝめてしれる人はむかしの事清き琴の
緒をたちきるおしきまて其れのをもてはひ乃さる人もありき人の
えしらぬ事をよくしれるにハ物をさの世ん乃みな紀すらむて
那り今の俳諧まことそれよりあまりふかく無一物乃心頭よ学
ふらむ紀ある俳意をも底くしる人ありてよしとえらなきき
ぬるかくし出く亦くの俳者のまいはくの句乃中よしと
見しれるをひらけはくかくしむかし那事をすける心のかきに

よりて人乃えしらぬさとひともえしまる那らし水乃ながら
をひをわき法のおしきてしれるもみなをりやみちのく乃乙因
此事をはしめにしるしもみハうつしかの野人夏成美那り
わかき所はうひとよくしれるなりすしけるによりてかくハいふ

題乙因旅日記首

清きおほけの世紀ハおえ無きさうつま乃はうに津ゆまれの
すみしく書つきぬれハれいひのをね旅ねのあはけふしみ
うへなるすれ心那るへしうれえむうちさるたびひとは
あるそわしんちすちまもちうにしめ清まニ度ぎいへ笠
のひし汁をるを清みうにうちきて死人林上す臥癩盆に

今ここに三百余程の芳ばしきこもさすらにうれさを形とうはらふ方あるく賡句といふ書ありて世江戸に三旬あるる乃日数を経て今陸奥故園に向むとすみちのゆくさにいひうせ巻く韻よみちぬるもうるねも野分のすゝれみるとうるしく行く所の家を矢立にうさみて書はゝねつ[illegible]のひけ〳〵多すゑ〳〵を陸奥人にうりてはうむ[illegible]線ひねふ[illegible]すゑ心のあるうにすゝゆふ[illegible]羅城門ますみゝとゝふ鬼あるの氷消さいとうあるにさを葉をうへむものゝ芽ゝ時あかうと心しては市物のけさにおうふ事わうとと多うまて友人夏成美多田の森蔭のゆふ月夜丁菊を採

金翠句帳序

忘年の友硯亭はねに来て用を為さくうりていふ風情をもゝむうに胸中ゝて一事のたくさへ多ゝく句をはゝ取てうるもうとわをいとをうに俳諧八無念起をうゝをす後中万巻の書行うもふふふ史けゝに持のちうら我かに木のはう〳〵一家乃工夫あうて世会うと一有をゝ〳〵一有わうまて芳象とする見る実むりふゝをうるそのの物多うに心乃師と形うてさゝ察にお情をうつをたをゝを一紙小画くうゝくわうに一筆をおうゝうをうて持のうゝち

きさく にそうさ水墨乃なれるを丹青の色をほどこし
一大観とふまて やもをあけ めをあとへそ あに一張の白紙
形のおもし物と心やせまるて形をあすなの形ふ変を矩て
なるこれ規によりすしてあのほう廣莫乃けしひふあるを
屋ゝ乃ゝもや 説経師の馬ゝのふあをひふなるふすれまし
ふまを序やを

書句帳首

いはまゝ先ゝつまゝの後形ゝんこをもあをすとてなさ、やく
起おて例のゑ書きこゝにるゝめ人のうをけをひはゝうをに
書まこハ人ゝまるる森すれふて昼けるふまてきちてけて心
さすす處にゝゝあゝりぬゝれを此やゝうの中けゝてゝ お後れゝむ流ふ
屋ゝをゝれ梅乃春ふけれゝて咲あるも八朔梅てゝふ
まをけふるにふゝ流とゝゝ屋ゝ交ふゝ終るわゝふのけく
らもおをゝやをあまをゝめてけるある人のいをく水まはく山
ゝされまる所にゝゝるをゝ心画の中にけをへるおゝひあを陸と
上ゝのゝゝ画ゝ平ゝひてハけゝに陸ゝゝの山水をわゝれ新
ゝ地をすふといへをゝまいまゝ先ゝはれゝ後ゝゝん俳諧の
流ゝまゝくゝかくゝ乃ゝゝ

浅草反胡小引

もすらをゝゝみはゝまふふを家をはく事事ふふふ所

あり[illegible]を句[illegible]を[illegible]古人いへるあと文臺をお汚せい
ふ[illegible]こ也[illegible]も先達のいひすて書すてなるちもやあく
たをあ〜ひうちすれ〜へ〜て人[illegible]も尽なきとふいはゝ[illegible]つ
〜[illegible]白居の楮先生

贈短冊掛辞 以住吉松樹製

姫松乃あんさく多人乃もとをとをう〜我日ふることて
[illegible]ひふこ[illegible]句もいひ出ねいとはゝもあく[illegible]ことを
〜を吹石主人ま由あ〜するはまの紫乃ま[illegible]屋[illegible]にあのひ
め[illegible]〜て合抱の姫〜おほ文[illegible]ふ[illegible]ま[illegible]ほ〜きあと

賀不老庵落成辞

不老庵地を[illegible]ふ[illegible]いく[illegible]ひ[illegible]や[illegible]すべての人いすこ[illegible]〜
所のけ[illegible]ま[illegible]れ[illegible]ひ形[illegible]を[illegible]あ[illegible]て[illegible]
[illegible]を[illegible]を[illegible]を[illegible]を[illegible]を[illegible]を[illegible]を[illegible]を[illegible]を[illegible]を[illegible]を[illegible]
物に[illegible]も[illegible]ふ[illegible]へ〜[illegible]の[illegible]ひや冬乃
日[illegible]方を[illegible]て頁日乃たの〜みふ春を[illegible]
市[illegible]乃[illegible]ひけ[illegible]に[illegible]ひ[illegible]此庵乃
の[illegible]の心[illegible]の[illegible]

吾季作の門[illegible]松乃[illegible]

示若輩辞

年乃は[illegible]ぬ[illegible]の[illegible]て月[illegible]乃俳諧

すゑに志年乃友とゝもゐるゝにや日野屋さの蓮亂はく
しの園さもものの子をやもこゝもこゝろもおとうようひて中く
けうもあくさ無わさゐるまりふい蕉翁忌ゝそ伊乃めこも
はさひ者れをおのをおこうゝをも物さゝめのはゝをめはさる
ゐしてゝうゝ乃ゝを沙法を庖丁ゝ乃ゝとゝ紙ゝのゝさる輪
扁の油けゝ北教車吾子等に法ゝくむゝとはゝうゝにいふ
けてゝくをゝゝ伊ゝ乃ゝ

新乃ゝをゝ風雅の心もて伊ゝ

賀巣 兆書画會辞

万花枝を辞ゝ狂風おもてにゝ紙ゝ北教書画の乃をひも

打ゝ中て舊友巣兆同好をあのめ筵をゝくゝすみゝ川の
落花を水絆にたゝくゝとゝみ入樹ゝの木乃めを莞北不
にほゝをゝ此日天けを風ゝ乃春のゝちめをゝちゝに
をゝゝは屋ゝ者を集る門人等東倫の法ゝみ物をもてゝふ乃
費にけゝをむゝす此る世の中めけをゝをてひゝにゝふき
ゝゝもけゝを平いゝくゝをゝ凡四民ハけゝ乃をゝの余乃北民
伎藝をもてに服乃はゝをゝをゝ人ゝ乃おゝゝけゝの乃ふ
人ゝゝゝ世を貪る心ゝをゝゝゝゝゝちかぬゝ行ゝゝまを
ゝちめけるゝゝみゝをけゝ世をゝゝゝる女乃伊ゝゝ乃ふもを
人のいひゝひゝをむゝすゝかにゝゝゝ風情をゝをゝはゝをゝいを

みもそなはりくいひまろひまるけんるもはれるうと
おのおのにけていまあるとあるにまるまるく無欲清操の人と
人もまるるるるうにはまるうなるてまるも世人りおあ〳〵心もち
ひ紛れ永黨あれを瘦あるくや笑ふ也その伎はまあるくい
人りへまるも見へるるけ一句一帋乃筆痕人見て珍んとつふ
もあふまるまを賣る得まるとふものまく賣る事れ〳〵
丈夫乃心何を恥あれをけるるむやるるやまを兆る画氣韵を
むるや〳〵筆端妙をあるふをやそれ人まる冥〳〵くわき
書画のるまるのむといへるも藝はまふるまい人まる求めて
るやめいたるるり賣むまるるるの集會乃めてるるら

屋ゆ〳〵けるくゆるるるるまいひまるま聖句三章をひ移見ゆ
〳〵てるる〳〵を賀すいよ〳〵此伎の世ふもひるるまゆ あひ
ねふるるのゆわまはゆと今るるはまめて藝ふけるるむ事を
おのるのるの乃ゆ

花鳥乃身をゆ屋つるゆ〳〵にる
るる人の多屋も見ゆま門の花
おの〳〵後多人をのる〳〵て春をゆく

題燕石談古室

伏生ゆ記臆稗田乃うしゆ物おはえけるてゆう世ゆの史官

筆をけづりおのずからいくむしろのあとをもとどめて今乃世にありて
めの国へまうでゝの徳をさとりしる人もなくして古今文
物のかゝるとある治乱のうるおくのいきほひを人くなつかうて
足利のおくかゝる雪舟すきくい此国にうまれぬる功
臣勇士そのおもゝちはひとしてもあ今古にうきき
おくうんやうにいひあるに麒麟閣とかいふ殿にうえはまと
る画やうもひろうにおすひ屋敷ちくいおもやに人の
ひはうふる孝子義士乃伝れと今乃世見ふちゝれとの
うるとふみにかうこうなりてせてその實をあつまあやうりを
あ氏さ保中にうあ国くもうこう文

時代のおけけめ秋霜三尺乃ひうと月日やうえにてゝせ乳
はあるみのうしけれさをおすひはれ弓乃本すゑうをたりへ
うるををへおゆゝく海しゆうして月毎に集會し高
かるみに俗とあんせむこいふ見をや飛耳長目やもいふ屋く
かゝにけきたえきくをとめるもくるはゆるれうせう
わるおくく舌おもくおゝ家毎にたるものこれをもちや
をうゝ屋文れゝねと多男乃家多をたのめる友れゝ
鳥乃ひつき友の日をうゝうたるるれ世人くのうるる
ひうをひたるとりようう屋ましはのひうと水無月の水
少ねしれ屋硯をれゝしてくいひあくれ時ハ寛政十年

いひて又ひやつをうそへはすめり年也

寄相撲題言

其の声をきくにそれおもてをそねる心片おもひ人の
はるかにゆくすゑおぼゆき傾蓋ふるさやこいへるとも
けふ事ふやかるゝ妻とその聲をきくそのおもてをもしに
もはつきの小松ひくくうるはしくて霜のおち葉のちりくは
爰うゝはすへて此國のにひむしをはらゝ多たうひて
をのひをちゝ踏み作意のちゝをあゝそふほとにおのく
心既ゝ誰ハ此妻に工夫はゝくうれいその場ふ葉ちゝ
ゆくおのひをちて其聲をきくのおもてをうるおちや

せ心ゝ壇先とゝ法師乃る雄の文覚ゝ名をあらゝ
おもてハゝらぬにみちのはるにあひて身屋ゝきふ
法師をらめとあゝにあてにあれとなるやらゝ事も
ゆくゝゝや小貢か紀てあ多ゝてその後得意乃やゝ
ふゝくゆゝるふやを世捨人のゝくハ與ゝふ所行ふまと
ひやすちにすさぬるすゝなきもゝふたをひあるぬ屋
多ひく書状よいひゝぬる句やもゝふゝにきえこぬ
屋ゝにゆゝもくをゝハをにゝふ多ゝぬあるを作者と
おもひわやゝぬふゝもおもひやとすゝに菴ゝも
多ら入ゝるふくゝに状あをせて合点をもあひはゝゝ海め

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一番[illegible]

梅園記

梅を[illegible]園と[illegible]て松を[illegible]して松亭と号け柏を[illegible]て柏菴かといへれ[illegible]

[illegible]傍に寺[illegible]安樂寺[illegible]彼は[illegible]

[illegible]名を[illegible]

その南に菅神乃みたま[illegible]つき[illegible]乃

[illegible]世宮居に文雅の冥

意をいのる渇仰乃あまたに衍愛樹の一り実[illegible]

て[illegible]根[illegible]枝[illegible]へ年々に芽をわちわちを

[illegible]野梅枝すくれく座論ハ花おほくして[illegible]緑萼ハ白ひ

おもやに豊後といふものハ枝の實をもてもて屋敷を八朔に

[illegible]寒紅梅乃[illegible]鵜梅といふハ花[illegible]

[illegible]消梅ハ[illegible]をいふ[illegible]龍乃[illegible]

[illegible]雪[illegible]もの外ひとへ[illegible]

各きたるゐうすゐ色におのくゝうちをゆくゝの〳〵媚をほくす
かくてを江南乃天氣庚嶺の色に少ほひみちて居りて園の名
実ゐりゐ体なりゝしその中に小亭をうゑ賓主四五人
接をすほめて狭〳〵しといへども各〻ゐうまゝふ座き柱ゐりて
ゆゝしのうちよりをきまりのゆもゐゐりゐ一炉のゐ座に身を
ひきすゐ大ゐゐ酒瓶をすゑ後圃まゝ杯のほゝゐりゐりさ
芋栗ゐりを醉郷に客ゐむゐる時〻三方乃榻をゐきすゐも
せまゝゐれをなりゐりを重体凡此國ハ雪ゐにふくゝて春氣乃
ゐきゐりゐりゐゐの山乃樹ゐ千も人の園乃ゐちゐ
はゝ氷肌玉骨はめてほゐゐむゐを花ゐ對〳〵て醉ゐる

ゐりゐ酔てゐれまむゐゐゐ時ゐ〳〵主人ハ花まゐゐれる
人ゐ酒ゐ隠ゐゐ新人ゐ持もゝく風雅ゐかれゐ人ゐを
今ハ十よ年乃むゐ〳〵江戸ゐゐゐゐゐ深川乃古池を
ゐつゐゐゐにその世乃ゐゐみゐて居せゐる芦乃ゐてを体
を根ゐ〳〵にして為仲乃ゐゐゐ長櫃ゐをゐゐゐ〳〵ゐゐ
ゐめゐゐゐ此盆池まゐうゐを池ゐ屋ゐて園ゐを造ゐ
入道ゐ此亭にゐゐれをゐ乃句を石ゐ居ゐゐ芦の句西
上人の善通寺乃松ま影せ〳〵ゐ象をほみて杯のゐ〳〵主人
乃心様をゐゐを南ハ阿多々羅根ゐむゐひて万葉の古名我
志のゐ北ハ磐手山ゐそむゐて源二位乃詠をおもゐまゐゐ

見わらうちむひうちなる所ホハウ[illegible]ケウ[illegible]ヒ[illegible]ホ
来りてわら葉菴にむう〳〵徳[illegible]はて此筆乃ウ[illegible]筆
出りて醉の中に圖〳〵けりぬ見を壁にかを杖てかれ
人のせちにさひ〳〵雪乃舟あれも出へく杉ほ[illegible]時ろの
圖よむうひて落〳〵寞〳〵ゆ[illegible]の中にその[illegible]ひを出もに世堂
すをわすふわも夢寐に園中乃あもむさをわすまに
ある〳〵わる贅亭をあもやはるやまさ乃後[illegible]
書てわくるうちの千里に一枝のうをよ〳〵心をく也
見を記ゆす

題龍几句帖

尾を見て雀りれりうて紙見れをあ屋さに〳〵してうち
あつさ生にこうをもてすまいうれうにけつるはいう
こう称をわりくすれ心をもてやまつれ事ゆそ俳諧乃句法く
うも玉河屋うかをあ屋き世人の褒貶乃ミおすうして以ひ
出れを神情ゆひにわうるれりてそれ的ていひ乃ウ新
るううかるくし多く芸念ゆを一気のうそれおておのつう
天地乃運動よちうひ萬象のすうにいひうあるうそ
めてうるくあ於ちまて諸方の好士うち金音玉聲を
をうすして此帖て一句一章をうるうし多うくんす
うれ雀て紙乃うて尾乃ゆくくしあへ紙をあひね

うふもれ也

素郷自句合序

かくは里乃はのうへにぬる河の水をあらそひしハ名
利を好しむかしあらへしもとにひゝきをひあり
同類乃句を蠻觸争かさねまゐらせわれにうちやぶるをもとく
わきまへふそれ他者ハひとつをわかちもち縁てさそれ
あけもうまへは甲乙ともに一時乃わらひとなるも乃也と
おもふに昔し西行上人のみもすそ河ハ後成卿のおと
を競そくらへしはるかそのちわかすめるか勝鹿に在し
素堂老人それにならひて自句合なし判のことばもかき
みつから書ねさまてを先縱としておもひよるなるや其ハ
判者もみつからなりぬる事を責を繞をおえてわれまた
ゆつまさられハかれ素老人かすみかしはしわれ名をあらつ
そわれへしものに興して心のおよふ事をさきにす
わたくしを素郷か句を他にかく名利乃間をはなれて
はかなきものは乃めてたき是非を心にかく古代に
して意匠世にあえるなる は乃哉わかはなれ心にかく是非
せむすれはなかにありしのち乃人判乃おとろきを
みてかなしいまた世迷中の是非ハ是非俱に非也也

題空則是諧後

忘ほうしの面にひしゝゝと苔むすまもわひ
しけもあく中に書足はてひちさ雨とふものをうれふう
おうやうなへぬ管乃小笠に贅はあうあうくたの苔
ものもえもえもとうちきうれの錨きてちやくにぬれて
踵のもやにはよりうまを面をて笠履乃尻をうて足半と
ふもれまれて爲のふさめくやにひゐひあうけとるは脛乃
ちうをうて泥うにあうぬ世に俳徒してあうよりは蛮
来まうなうに帝乃地獄すおつうやうめまをやゝに
あうにはうひ捨うる紙葦の罪ほうかしにて六あみて
めうをとふ拍やうてすうにうはぬを嵐のわひ姿よ

続詞花集
人をすゝめて仏供養しけるに
ふる雨のときて袂かゝれい
礼盤よりおるるとてよみける
膳西上人
いとしをたのもしてもきく人も
尼なるとゝやはい
法のうゝをたうまり

おもふ後乃世もけをとれくもうに膳西上人乃説法しゝ
ゝる所に面ゝうて衣の神ゝうをきいもるやハ法乃ゝを紀
ゐ紀ゝうと面を扱乃すれ写をを わひ弱ひしに先ち
けうゝふ面のあうゝ面ゝれとふくもうゝして尼れる
家にゝ者ゝ破をうゝも面ゝ一年とねむやうにて求め
あうる赤ゝを紙の古骨の荷袋の雲にひるゝうゝれる
紙に人ゝ肩脊にゝうゝ者面をゝ中乃ひをうふやう
此古傘のほゝうゝれる御佛の輪後光とふもれふおひ
ちをゝうゝ此中に摂取せられて四十八本の骨くも
弥陀の本誓あは面のみあゝ我ホ小根小樹のあゝ凡夫乃

一味の法をふうるほひて踏すへてをるを柏子ハ一遍の
称名ばかりをもはなれ功徳豈むなしからんやと果ハ
ちみをわりて庚申をまつ乃あるじたる麦宇ゝ物語
せうはんに随喜の筆をおつ取て此画傳えはえ侍る

麦宇句帖序

観音めぐりの乃詠歌帖道者頓礼の念佛簿ゆゑ
ゆゑひは吾ゆもうるの句草紙とゆふハあるゆ露四く処の
人くに狂句いとりて書ゝあてやとそれさるのすれ人を
多つめる使をゆ付まて三日の糧をもゝ〳〵ゆ千里
独行するハ風雅にあるふるゝ話計也吾友麦宇ゝの

おもくしてみちのくゆ果のはてまてゆくゝん事ふるのわう
きにのをみて為をむをりゆ夜乃雨窓をおて山館に枕をさゝる
ゆふ〳〵暁の雲ゆ笠をとゝ也ゆて野亭に杖ひくゆ〳〵たるをゝう
あるをゆ友をゆ〳〵ゆ子ゝゆ〳〵ゆ丹青乃業も柱嚢せく
して粉本ばかりつゆる事ゆるをハ筆のたゝみもゆう形〳〵んや
宇ゆ付をゝまを徇中一味乃俳諧ばかりゆ〳〵ゆ為ゆるゆ
ゆくもはゆうて心の友とゆりて拾をもて中をゆのめる人ゝ
はゆゝをハ五歩に友あり十歩に朋ゆ季豈ゆ独をゆは
しをせんやゆを山水泉石の月〳〵の旅ゆゝをゆりゆきすへて
雲烟の眼ゆるゆるもはゆみゆ吾画中乃趣ゆるをハはゆゝに

古人の係をかけふ此人の心あうさを此ふ筆
ひ雪つもおもしろ紙屋〳〵せうゝ張場ゝ外造化を
師ゝ中心源をゆうとゝひ〳〵ゝわり有域あをゝ拙
すれる雪ふを域この筆寥乃序ゝもゝ〳〵ゝ湯に
書ておくるゝを多田素老樵夏成美

日牌帖序

安期羨門我ゝ名をきく手人今いくゝ多ふ大椿
靈亀あを甚年ゝをふ於はゝゝをいまゝ見を見ん
二鼎齦牙すゝやく白駒蹄跳猶加ゝ誰乃人ゝはひゝ
此安婆ゝ住ゝつ屋ゝけをゝ菊阿佛ゝ上手も死ねゝを

歎せ〳〵ゝをゝを哥詞鄙也とゝ心ゝゝ邪ゝに兼應頃
ゝを以来の名師の終焉を諸集に探ゝを歳時をはゝひゝ
ゝふ〳〵輯録して一帖の日暦とゝす見をゝにふをて一を
ひも飜讀せん人ゝすゝ〳〵ゝ綺語乃因をゝゝして多く
佛乗ゝ帰せん事域ゝゝ〳〵ねゝをくゝ此風雅をもて
あゝねく一切ゝほとゝ〳〵吾ゝと底生と共ゝ上をゝ
地位ゝ至ゝんゝを帰命稽首敬白

藻實草序

李義山ゝ雑纂ありてゝ清氏ゝ抗けゝ〳〵清浦ゝ物
ゝ袋甚角ゝ雑談集みれをゝ趣をゝゝあほをゝ物ゝ事

ふるあと書ふるもの何をとる所あるを毎見えねともあ
おのゝ所にえもてゆ者人世の中乃憂喜もわすれうるに
あはるあやゝ見まてゆハいうあとありつに多くそれうある
人の心をうつるくふ所をいつるもれく書出ふ由ゑなうへ
しきある人のいひたえせる所多くみい見うたえ人ゝ後
世に頼芳老人の書すきみし物ゆうのんのうを書
めうく辯の多くみ見る詩をあ人狂句れとあほく出せ
多雪此多くひ乃幸わもも有て見むとれのみに付に何
事もうまにあるふりに心きいふもうきうすへてあれ
原むとわゝひて原ゝぬそれうをけゝめふうあきいふ

侍ゝ量心所著の草詩取て誌之

發句帖序

すみゝ河乃蘆荻霜ゝ卧て人ゆ絶ゝる事乃扉すら
さゝゝあくせんゝ秋文に備中の國ゝ書音ゆ乃先のゝ
挾室に膝をかゝゝ談笑あゝすゝ多わゝまゝ斗外主の白
楮一帖をゝとゝて詩ゝ物ゝ出はゝゝきゝ由ゆて潤筆の
ゆゝて一尊乃ゝゝ酒詩れゝゝ世紀蘭陵上著の多ゝび
閑寥乃ゝ紀文ゝさゆまゝ草ゝ見をのむ侍ゝのみ
侍ゝ詩ゝゝゝ吞はゝゝて詩ゝめて筆をゝ詩むゝ
法ゝゝ乃女のゝゝ帝乃多ゝひゝゝに筆をゝゝく名多き

[illegible]ハ法[illegible]のたゝひ[illegible]ねとゐ[illegible]の
好士の[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]る俳句ひ[illegible]法[illegible]書[illegible]あむ[illegible]れの
法[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

其由といふ別号を人のきゝはいつゝるに是と宗ひとるゝ事の
うるはしゝて屋そ其由乃名称於て月川とよゝれるゝ
樓室なるも古るのみ於きいれうしゝ乃庵乃名称ゝ
すでに世を於きゝ名称すゝ風雲にとゝく多る仏の中いはは
ゝを孫ゝ是ゝむゝ多きくもかゝさゝと世ゝゝ此因乃海
屋まうみゝひゝおほむ称乃ゝ是の宮ゝの多きひゝ
多賀大社ゝはゝへてゝれ社造営の事ゝ執おこな
ゝれゝる見もかゝき心乃冥意にゝるゝ屋ゝれと
みつゝもゝ多きひきゝくかゝれゝくてはひに寛政庚申
四月廿日大ゝかゝき休ゝ是ゝるひゝ是れゝみゝと是ゝき

拘礼ゝきハゝてゝるのいひ於ふゝ狂句若干をゝふゝり求て
ゝ方にわゝちゝゝせんゝいふハ因人塘里等ゝゝふゝるゝ乃仏ゝ
ゝ是わゝきゝ上人乃久ゝ紀知音ゝてゝちゝゝくもゝは是
ゝゝ屋ゝ因孫涉ゝゝれハ一ふゝ書ゝくゝゝふはゝ懐舊の
ゝみゝ城拂てゝれを古ふす此集やゝふゝゝと上人の本意
ゝはゝあゝゝふ屋ゝ

題祇徳法師句雙紙

ゝふ屋の山に雲はゝて杜宇乃帰ゝるふ有明月ゝ
馬嘶て雪崖の寒ちゝゝる梅ゝ野の原ゝゝゝ甲ゝ花舟のわゝ
ゝの不せちくて笠にゝさ手ゝゝゝ盈の屋すゝの松の系蔭ゝ

薫風を懐ふて志ろしめしねむりの夜の面影のあるかぎり
れも多くの日々の轉變 旅おもひたちをりをり俳諧の
連句あるいふもおもしろ句ふにかなるゆく末紀もく捨あ
なしきすへて世中にたちめぐる人のすさみも帆あげる
船の風ふにあるすれふるもしらず日々の旅なりして
まさ行きやはきは翁もいへるごとく世を旅に代るく小田
乃とゝ侍ふいなく東海道の一すちもあるぬ人の風雅に
おほつるわれ也

吟社懐舊録跋

人乃世のたすうけるおもてのあるやわまにいとゝ紀
人しるかまを少もさとるえあるとはきとおのつゝまれるも
心おすき友のおゝてやはける人のあかひにあらすしてるる
おゝふへしわゝ蓬窓にあふりて月あれよひの淋しき折
くむしまを名あふ人くのおくるゝ年月紀
法書よりゝくはゝ人ふさけるゝ紀志ゝわすまてと
命のゝにも付る物なを祈ふ蒲生の中埜生ゝ物
ゝゝ紀さくに彼人乃伯父吾扇老人ゝたのおくゝ出あつ
めて仮ふ懐旧録と名はゝて平等回向の念佛朝ゆふよ
はゝめるゝ老人ゝたくるゝて後世の志乃むなしく
おゝ人も念あるまゝ見を板にあるゝ同好の俳士ゝ

あるこ屋んやそわきに按正せしふ老人のいけるせて
たひよきしにあるゆすすすそれ志のいけるもあら
ゑ浜ゑまそひしし記老婆心ある絨とそれふるうを
あるひよ換益してはしうそれ見をゑん人たへ
彩絨あるしもれうる絨おきあひあるんい中埜生う
孫ひ也といふるをきまるたひしし人くて
告きうす事にあむ

書句合後

なうすひの露片〻什乃京草堂已水枯くいかるを
彩支に世句合を判せしふ人ひをけるうあたをひふ
ゑうい心を入侍まきそれハはるうれそれふて今ハ漱乃
柄も持ぬ〻記年月ゑ新ゑうちわすまるるれまとさすに
いあ〻あつ〻くそ涵筆やうてう〻絨書はく
東郭乃瓜き泥の芳所よけける味ひをぬ〻きを歯そほ
ろにはすあみる差圃の身て八甘文をも淡〻これ河中る
あひたはるる屋〻あ〻茄子の肥ゑそれも片〻あのかほ
それもうあ芸れくの姿うて漱八見非よわるへかに
ゑそ

書句合判辞後

世て杉そ孫〻き鬼ちとを画るもれハちまハ似片〻めと

けもものね〳〵おほはるた大馬れとの目よりうれハう屋うて
ゝれ物ヨりゝ〳〵ていまゝゝやとれかゝれも屋ゝれ常に屋る
ゝゝく字すにかゝれハ人〳〵の目ゝも心ゝもゝくおほえ
ゝるゝゝれまゝていさゝゝれゝるうひめもめふハゝゝりゝまゝ俳諧
の短句はゝゝるもゝゝくおふゝく世にいひゝまゝゝる俗談をもて
ゝゝゝゝまゝハすゝゝのゝゝめも耳たちぬ〳〵れ卅句合といふ
ゝれふ判のゝゝ系ゝゝ〳〵ゝのゝむ人ゝゝまゝ多田乃
森ゝゝふゝゝ松ゝせをのゝ聞ゝゝまゝて琴をゝゝゝもゝゝゝわゝ
まゝすいゝゝむや蛾ゝ洋ゝ乃音ゝおいていハいゝゝ〳〵れ屋ゝ
ゝれゝゝゝまゝと目よゝゝれ俗談ゝまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝをゝゝゝわゝを侍ゝゝゝゝ心乃ゝゝれハわゝゝゝぬ慮ゝゝ
屋ゝゝゝゝ犬馬のゝゝれ屋ゝれ卅ゝゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝ
に人ゝゝて曰他人屋上の雲ハゝゝもゝくにも自己身上の
風雅ハいゝふゝわゝまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝい乃他人の手をゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

畝はゝゝ序

山田ゝ水をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ畝ゝゝゝと名のゝ人ゝゝゝ欲乃柄も汚ぬ〳〵きゝゝれ
ゝふゝゝゝゝ田子乃裾をぬゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
風人騒客乃心の多ゝゝれてゝゝ染ゝ紫ふくをゝむと

るゝ／ばかりなる秋乃田のみもたのもしく花實ゆたかなる
おもひおめたり今の世乃流れハ稲葉の風乃ゆゑくゝて
いふも姿のむつゝきをうゝたおもふ和哥ハ文覺なりて
詠ゆゑ乃をさゝ／あゝきゆゑ乃ひちをうて又曲れ
世乃ゆくゑもあれなるとゝ慈鎮和上のみなもゝ／ゆゑ
おのゝゝ／かゝ／と又曰ゝの文字ふうゆゑゝて此国の
人ハ哥乃みちをゝ／ふおりゝ／ゝ／ゝ多ゝ此の国ゝの
風俗也と此撰者もおのつゝ国ゝ乃流行をゝんゝて其
境界をたゝうむとゝふ心あるゝ／撰者ハ三鴨乃麓ふゆ
雲蓋戯りゝ乃数言を題すゆゆハ多田乃老圃夏
成美也

書水音集後

むゝ／佐國といひ／人乃ちゝはの花ゆおひたゝる紙
るつゝみて園乃美柴にあまゝゝ／ゝ／ゝて／ゝの據を
ゝたをけゝめゝゝゝ枚長ゝ蛙を見すゝゝゝゝゝのゝゝひ
ゝて秋乃さゝゝゝ紀声をおゝめてより冬ゝゝゝの土ぬを
こめゝゝ／ゝ／ゝひたゝ山田に水をゝゝすゝゝゝゝれ
ゝれるゝゝねをゝつもひゝゝに師とたのゝゝる人乃
見ゝ／ゝんゝ／ゝをゝうむゝゝれゝ蔭ゝゝゝひゝ／人をおも
ひて井棠の木もれきゝゝゝゝとゝ枚長ゝの人なるゝ

櫻句帖序

佛はいにしへの乃うれをたてまつりて後乃世うあてきこえおこなはれはゝ西上人乃花てうこゝろ心ゆくを出羽の國大舘浄應寺とゝのにひゝき木乃橘あるを見てゝ誰此みほとゝあにこゝろ種をたてはつるをおこなけん今はひろき國乃中にあこひかくおほえるを木やをうてゝ慈眼をみをあらゝをみかるへゝそれのはゝあゝをぬつゝをぬ雲に咲はこゝろ先れ多くにをひは堂てみちはゝ弥陀乃はひこゝををくて法をの極樂あゝもゝへゝ見ゝゝあゝゝ一味乃法雨てゝ深ひて心をゝ草木をゝも浄土の孫をむすへる

ゝゝゝにはをへゝる人の一句一詠をゝゝて花はゝゝゝくあをにちるゝも色香のゝゝみはゝくゝゝはらんゝをゝと句帖とゝふものはゝてゝ人ゝくに筆をゝゝはゝて此句むゝををはゝめゝ書はゝゝゝ尋風乃許ゝをいひゝゝゝぬいゝゝ目ゝをぬゝゝひゝをゝと吾もゝゝ花てゝむ心乃ゝゝきゝをにおゝひをゝのゝゝ見をゝすゝは極樂もはゝめて到ゝゝ所ゝきけはゝゝをはゝる事をゝゝはゝ千里の外乃すゝゝ川の花の蔭ゝゝて花をゝ花は流てゝ筆をはゝゝ

句帖序

春乃雪窓をあて掬いゝゝひゝゝ履をはゝ杖をひゝむ

下も老懶せんとあくたるを一炉小ぬさ炭球おほく吹おこしてひゝ釜しいつもれるをひねもす茶をすゝるあるをちらに何うゝ乃老人なれの世捨人なと膝をならへて稔下腹ふくゝしたのゝく六盆の奥に入茶具なとをつみ川取おて見い唐屋うの物かきい誰くゝの仏まる形とおゝなをふりゆにつるをを中のひとをりいやうを屋て茶をとふもをる名あるき人の書付あるあまを みるものも珍れふ心うはまを屋をて特のものをきををゆくあるを たとへ屋をまるをををうをも茶乃湯に用らをとををひ侍さを見るを侍ふをの目をゝ やいふあるを利休のををふゝ

其角ゝ雑談をも書あを侍しをを人のををてをををひしををいふあを或ハ花押をを加へをる物をををていふをも故ををくを器あれをおのをを心にををけををてみるを名に侍ををのををを

句ゐまいふ文故ハあんゐ者ゐおとゝ人乃言に
はゝきれてたゝゝゝゝゝゝおゐゐゐ〳〵ひと〳〵にその真ま
せゝゐ里て句くの骨髄をゝくゝゝちはゝあのほゝゐおゐゐ文
所ハゝゝゝゝゝゝゝん世物ゝゐゐのゝゝゝゝゝゝゝ屋ゝて筆
ゝゝゝて序の心に云付侍る

勝鹿目記の内

ゝゝゝむゝゝゝ紀日ゐゝゝゝゝゝゝひゝゝゝゝゝゝ頭いゝ紀よ窓の戸
もあゐゐ上野のゝれみゝゝゐれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝひ
みゝれよ者ゝゝゐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ちて多田の麦乃みゝを取りく夏にあり西く

おゝ波もゝへはちく松の朔爺紀

金翠吹石蒼波なとゝよわゝき人く来りてかゝみを

題をゝうち句をよ杉の波ゝ抱ちゝはゝせめ紀ゝる

おゝゝかゝいひおゝふかゝ俳とよゝの餡乃らはきゝゝ

味噌湯ゝ多るかゝに心ひゝるゝゝいひてわゝゝ旧國ゝふ豆

乃ゝゝに秋の色ゝゝちゝゝゝ

芝の便りにとて扇子とふ来れるを浪花の宝紀人等の
清原氏乃女の名をうまて出るもしるかの貫之ぬし
日記乃おもかげをかしこあはれふる句をれる屏風
屋かの紀の画もおのはうむしめて屏風にしるをの
はてさとはにはくるをあるを今の世乃上をとふるる長
齋魯隠自樂芝の外乃人々ちの額をはるを掾ををみは
うめ紀先るもはれをいなるふるう見はめするおくわむはめ
ををあるくしくはふくやをむ附合のめてを紀句に
うををゆくはをを海旅ゆく人乃浦里に眼をはたむる
仏地をする發句をいふもはくをかるうへかを紀

ゑに すめるかもあ此人等のにをを海はひあるい生をす
ゆれをを寫乃おを笠の上の雪ふのをあるむもたをくは
屋をむるはるるむ晋子丈草かとふ人のふをひ此世に
はをふ生もるかをはをぬ屋
夏の日もあるおるるにはをるり
生をほをれるく日人をぬををあるふに長齋八年おを唐の
ふみはをるてはをひしく人のいをを心乃をを紀をめをや
此はいをを体の句に心いをををををををの本才のを
ををれるおるををかをう句おをにおるるをるのいて
きれるむ生をををれはゆをはのをの俳乃みをのををを

ゆふひかゝやくあけぼのゝ空に秋の風やゝ立そめけむ曾
隠ハさ川に江戸より来て人多とゝまりて川の舟をまちふ
してたはれ鳥のさわくを見て有まゝに古園をたゝ
心をいひしらるゝと多く目のまへの屋うちなる
すみを河ちうをゆく紀国古島
三日 夜ふりていやをゝしき紀るをむつゝ
きにゝ那屋の夜と屋つゝ千住と以不与ふゆく
ちゝゝ乃るを二本おくゝ夏紀
夜市の子やのとゝみ家ゝ音付て
冒も五日もあめ屋やもちハ長のゝ屋紀四条に
あゝゝやけゝゝまきて降ぬき紀むと人のいふ
ゝ紀ゝや桶の中ゝて五月雨

四山藁卷二終